若越郷土研究
53の1

越前の禅宗草創期について

池田正男

はじめに

越前の禅宗草創期について、その導入系を切り口として検討してみたいと思う。陸上系として

① 修験道系による導入
② 寂円派による展開
③ 京阪よりの導入
④ 鎌倉よりの導入

海上系については越前から遠く離れた九州の地に、曹洞宗永平派義伊や宏智派別源が拠点を設けていた点を論じてみたいと思う。

1 修験道系による禅宗導入

1・1 道元の入越と修験僧との関わり

『永平寺史』(S57年刊行)は諸説を整理・解説した上で、結論を導き出しており、今日においても禅宗史のバイブル的史書に位置付けされている。しかし、その刊行後、25年を経過し研究が進展する中で、新たな資料が出現するなど、その一部に書替えが迫られることも生じてきた。その一は当項に記す、大野市山上にある行人窟の刻字文言である。次いで波着寺の奥書のある記録文書、日本達磨宗に関わる新出の文書等々である。道元の入越に関わる、これらの新出資料を基にした論考等を踏まえて、筆者なりに検討を加えてみたいと思う。

①岩井説について

道元と修験の関りについては、『道元の入越と白山修験』[1]が岩井氏によって論考されている。紹介を兼てその要約を記しておく。

イ、『霊応山平泉寺大縁起』[2]には、平泉寺の四至として艮(うしとら)(北東)の峰に虚空蔵、巽(南東)の峰に荒神、乾(北西)の峰に比島観音、坤(ひつじさる)(南西)の峰には禅師王子と記してある。艮、巽、乾についてはその地の比定ができた。またそれらには修験の神が祀られている。坤の禅師王子は禅師峰に該当するのでないか。

ロ、『越前地理指南』[3]に「禅師王子山香岩アリ　此岩ニ座シテ泰澄護摩シ給ヒシト也」とあり、宝永七年(1710)の『大矢戸村明細帳』[4]に「大光寺白山香岩太田村持山ニ御座候。これは先年大光寺という御寺有り、この御寺より白山権現をことのほか御帰依なされ候、白山の方へ向せ、岩壁ニおろ(ママ)あり、その所にて昼夜香をおたきなされ、則岩おろ(ママ)に白山権現様の御神体を彫り付けて御座候故、古来より今に白山香の岩と申し伝えに御座候」とある。実地調査の結果、大光寺跡と伝えられる地は峰から少し下った所に堂舎建設が十分可能な広さで平になっている。また、その背後には十数メートルもある切立つ岩壁があり、文書に云う「香岩」であろうが、苔むしていて岩壁表面の状態を見ることができない。

(注)『日本方言大辞典』[5]によれば、「おろ。日陰の土地、特に山の北側」とある。従って「岩おろ」とは、「岩陰」の意と考えられる。

ハ、『大矢戸村明細帳』[6]に「導(ママ)(道)元御経之岩屋当村あまご(雨乞)山に御座候。これは先年導(ママ)元禅師様永平寺御開基なされ候以前、当所を御開基なされたく御思召ニ御座候テ、御自身と御弟子弐人両御三人当村あまご

山岩屋ニ暫之内御逗留なされ、当所を御遠見遊され候えとも、七尾七谷之落合悪しく候ニ付、今の永平寺御開基遊され、右御逗留中岩ニ御経御彫付遊され候故、古来より今ニ導元（ママ）岩屋と申伝ニ御座候」とある。道元云々については附会の説であろう。

『越前国名蹟考』[7]に「安永の初年登遊せし人の筆記に、右石面の文字連続して読得たるハ、慈聖坊慈眼・台眼坊・最妙坊・慈仁房・康治元歳、是等の外　一字宛ハ分明に見ゆるあれと、連続して読得へきハ無之由なり、云々」とある。地元では雨乞山には行人窟と呼ばれる岩屋があり、多くの文字が彫られた岩があることが知れている。現地確認の結果、行人窟は幅二十数メートル・高さ十数メートルほどもある巨岩の下に、かなり埋もれた状態で存在する。拓本をとって確認した結果、僧名では乗楽坊・最妙坊・禅十坊・臺眼坊が確認でき、年号では康治元□・建保五年正月が確認できた。

ニ、「建保五年正月」と多くの「坊名」は、「冬の行場」を意味する。つまり岩窟に籠り大晦日を過ごす修験者を「晦日山伏」といわれ、山中で正月を迎える山伏は呪験力が優れているとされた。

ホ、道元が禅師峰に出向いた十一月から二月は、修験の冬籠りの時期と重なっており、冬籠りの修験者とそれに関係して参集した人々に対する教化活動のためであったとの推定ができる。

ヘ、『泰澄と白山越前修験道』[8]の稿では、白山香之岩で九字と白山伏拝の刻字が確認され、行人窟では寺名「並月（波着）寺」の刻字が確認できたとある。

佐藤俊晃氏は[9]この論考（「道元の入越と白山修験」岩井孝樹著）を受けて、「入越以降の道元禅師の周囲には多くの白山修験の行者がいたことを思わせる。」と肯定的に記した上で、「波多野氏・波着寺・達磨宗・平泉寺・道元禅師・吉峰寺・禅師峰寺など、これまで個別的に指摘されてきた各々の関連を、再度、北越における白山側の状況を背景に考えなおしてみる必要が生まれたといえるであろう。」と従来説の見直しが必要との認識を示された。

ちなみに中世古氏は「これらの行人共が禅師を請して示衆を請うなどは、修験者の行状からは納得し難い」[10]などとにべもない。

②大仏寺移転論・非移転論について

大仏寺移転論・非移転論について、少し触れておく。

道元が越前の地に初めて創建した大仏寺（後に永平寺に改号）は現永平寺の裏山にあたる大仏寺山（標高７００ｍ）の山頂近くの山腹にあったとする伝承をめぐって、その是非が論じられた。中世古氏[11]は「道元が著わした著作に初期伽藍の様子が記されている。」とし、「山頂近くの伝大仏寺跡ではこうした規模の伽藍は建設不可能である。」として、大仏寺非移転論（現永平寺の地に大仏寺が創建され、後永平寺と改号したのであり、永平寺は移転していない。）が概ね大方に受け入れられ、定説化しつつあった。[12]

しかし筆者は、この当時、果たして地頭クラスの波多野氏がこうした規模の伽藍を建立し得たのであろうかとの疑念があった。（波多野氏は後に地頭職を離れ、平泉寺に関わる職責を得たとの事歴を紹介した論もある。[13]）波多野氏居館跡や波多野城をみてもその疑念は更に増

す。大仏寺法堂の開堂説法や開堂法要に臨席する参列者をみても多くの財力を持つ人は見当たらないのである。他にも道元が定めた禁制の条々を逸脱せずして伽藍建設が可能か。[14]（禁制疑念説もある。[15]）また叡山に追われ興聖寺を退去したのに、越前で相当規模の伽藍を建立可能か。（道元が叡山に追われた事実は無いとの説もある。[16]）等々を勘案して、相当規模の伽藍を現永平寺の場所に建立したとする説は、合理的ではあるが、相当規模の寺院を相当早いピッチで建立したとする点と、現永平寺の地は寺地選定文に合致しない点など（後述）から、筆者には受入れ難かった。

しかし、その後、郡司氏は両説に属さない新説[17]を出され、一応の決着をみたようである。郡司説の要旨は、①大仏寺は吉峰寺のことである。②吉峰寺にあった大仏寺を現永平寺の地に移し、今大仏寺と称した。③伝大仏寺跡の地には大仏庵（後に永平庵と改称）を建立し、道元はその地に籠り正法眼蔵等を著わした。

筆者は当説を概ね肯定した上で、岩井説を手掛かりとして、若干の補強ともいえる筆者なりの大仏寺論を記してみたいと思う。なお7・1項で岩井説の遺跡再確認をしておく。

③山林寺院大仏寺から永平寺創立まで

当地一帯は九頭龍川と足羽川との間にあって、越前五山の内の一つである吉野ヶ岳に蔵王権現を勧請した山岳修験地を中心とする行場であった。推定の域を出ないが、波着寺を峰入りの西方入峰口として、吉野ヶ岳（標高547m）、大仏寺山（標高807m）、吉峰寺の山頂（祝山標高705m）、経ヶ岳（標高754m）、禅師王子山（標高585m）、禅師峰寺を東方の出峰口とする修験の道を想起できよう。（常に白山を正面に見る東進道を想定）図1参照

このルートは大光寺以東を除いて足羽・吉田・大野の郡堺線でもある。よって当域は公界地であり、修験の好適地である。

この推定が正しければ、波着寺・禅師峰・吉峰寺・大仏寺の道元由緒地の結びつきは、吉野ヶ岳修験によるものといえる。

このような推定を行うに至るには、前述の行人窟にある「波着寺」の刻銘であった。つまり禅師峰に近い当地に波着寺の修験者が晦

図1

日山伏を行っていた事実が判明したこと。加えて禅師王子山と行人窟のある雨乞山のほぼ中間地点の山上に「大光寺」の寺号を有する山林寺院跡がある。永正元年（1504）記の宝慶寺寺領目録[18]には「大光寺分　黒谷ニ是在　分米拾弐石五升　経米料、玉岩御判在」とあって、宝慶寺が山上の大光寺を差配していた可能性がある。とすれば当時、山林寺院大光寺も永平寺の創立に関わる寺坊として認識されていたのではないだろうか。また大光寺は永平寺改号以前の大仏寺の寺号に通じる大を頭にすえている点が共通している。よって大仏寺の寺号も吉野ヶ岳修験の山林寺院であったことが窺える。

以上、道元は吉野ヶ岳修験地たる伝大仏寺跡・吉峰寺・禅師峰に拠点を置いたのであり、これらの修験者たちの同意無くしては有り得なかったのではなかろうか。むしろ修験者たちの強い勧誘があったと見るべきではなかろうか。

また後述するが[19]、当時、波着寺も全山が日本達磨宗に転じていたわけではなく、旧仏教系たる台密僧も住していた。前述の視点に立ってみれば波着寺は日本達磨宗を兼修禅として受入れたように思う。

なお、前述の宝慶寺寺領目録記載の大光寺については、建撕が在世した時代を三十五年ほど下る資料ではあるが、建撕在世中も同様な状況にあった可能性が高い。しかるに建撕記には大光寺及び修験に関わる記述は見当たらないのである。よって建撕はあえて宝慶寺に関わる大光寺のことや修験との関わりを排除して執筆したとも考えられる。建撕記は波多野氏の求めで書かれたもの故、波多野氏に慮る配慮があったことに加え、執筆当時の修験者に対する社会通念をベースにしているはずである。つまり修験者は公界の人たちであったことを見逃してはなるまい。さらに想像をたくましくすれば、その当時禅師峰の里坊をめぐって訴訟か何かのトラブルを抱えていたため、あえて修験との関わりには触れたくなかったとも考えられよう。

なお、後述するが[20]、時代は少し下がるが、日野権現が禅宗を取り込んでいた事実からみても、当時の修験者に禅宗が受入れられたことは想像に難くない。こうした修験者たちの兼密禅（禅密兼修）のニーズを満たすべく、道元が迎え入れられたのではないだろうか。

さて鎌懸、鎌掛、鍬懸、鍬掛などの崩壊地名は神が宿る所として、古来より信じられてきた。こうした信仰は山に住まいする木地師や修験僧たちによって引き継がれてきた。大光寺や大仏寺草創伝承地はこうした崩壊地に立地する。また大光寺山頂や大仏寺山山頂は白山を遥拝をできる白山修験地としての好適な地である。道元が越前到来初期に住した禅師峰、吉峰寺は大光寺山や大仏寺山に連なる峰にあり、まさに修験地であったことであろうことは岩井氏が提示している通りである。なお北陸の豪雪地帯でもあるので、冬ともなれば山上の修験地を避けて里坊を用いたことは容易に想像できる。道元に関わる禅師峰とは「禅師峰下茅庵」にあたり、修験者の里坊であったとみなせよう。また行人窟にある「並月寺住」の刻銘は波着寺にも修験僧を擁していたことを示しており、日本達磨宗と修験道を結びつける証左ともなろう。

また『建撕記』[21]に道元が示衆後に波多野義重に語ったといわれる「這一片地、主山北高、

案山南横、東岳連于白山禅苗、西流曳於滄海龍宮峰巒重疊人烟遠隔。」との記述について、如淨が提示した土地選択法に従って道元が大仏寺建立地を選定した。この記述は将に大仏寺山上の山林寺院跡地に合致する。佐藤俊晃氏は『白山信仰と曹洞宗教団史』[22]の中で、前記寺地選定語挙げた上で、これをマクロ的に捉え「大仏寺開堂の地がまぎれもなく白山の属している交通ネットワークの中枢に位置することを意味している。」と記している。筆者は交通ネットワークの着目は卓見と評価するが、しかし「主山北高、案山南横」を見過ごしていることを指摘し、大仏寺選定にあっての記述としては妥当でないと思う。当記述は二重の意味が込められていると理解したい。

永平寺は当初、大仏寺と名乗ったのは、その地に古来あった寺を再建もしくは再興したと考えるのが妥当であろう。

思うに、山上の山林寺院の大仏寺は、道元入越時は衰退時期にあったと考えられ、既に朽ち果てていたように思う。よって道元は冬の厳しき山上を避け、ここを奥の院たる大仏庵とした上で、里坊の地に大仏寺を再興再建したのではなかろうか。

それ故に当寺開堂檀越たる義重の生前に院殿号を「大仏寺殿」とし、その選定事由を義重に語ったものと解される。そして後に道元は大仏寺を永平寺と寺号を改め、道元自身の道号を永平とした。義重の栄誉を失することなく、道元の開山たる寺号を得るための深謀遠慮があったとみたい。

因みに義重は正嘉二年二月二十三日卒で法号は「大仏寺殿如是元性大居士」とあって、道元示寂四年後である。

こうした経緯が後世になって混乱が生じ、「山上の山林寺院跡の地に大仏寺を建立した。」との誤伝になったように考えられる。

以上、記したように筆者説は郡司説の「大仏寺は吉峰の地にあり、この大仏寺を現永平寺の地に遷した。」とする点のみ肯えない。つまり「寛元元年閏七月十七日、雲州太守自手山地夷曳、吉峰茆舎此地移玉」の記述と、「吉峰での示衆で道元自身のことを大仏とした点」のみでは、その証左として弱く、郡司説の全てをを採り得ない。つまり前者は吉峰寺から此地へ移ったとも読める。また後者については『道元禅研究』[23]に、道元自身のことを吉峰精舎での示衆で「大仏」と称したとのことであるが、檀越たる義重の院殿号が「大仏寺殿」であるから、道元が義重と重なる自称を用いたとも考えられず、後世の書入れの疑いが持たれる。よって「吉峰は字吉峰であり、何らかの寺号があった。」とする点は同意できるが、その寺号は不明としたい。

以上、筆者は郡司説の一部を変更し「伝大仏寺跡の地から、現永平寺の地に寺号のみを移し、伝大仏寺跡の地には大仏庵を建立した。」としたい。

なお余談ながら、大仏寺伝承地に登拝してみて、入越にかける道元の気迫の凄まじさを垣間みたように思う。このことは義演にも受け継がれ、白山越前禅定道にある報恩寺に閑居した（次項参照）ことにも通じるものがあるように思う。

いずれにしても大仏寺伝承地が発掘調査されれば大仏寺非移転論や当地は如何なる地であったのか、明白になるであろう。なお波着寺に関する事項は3・1項で詳述する。

1・2　永平寺四世義演閑居の地報恩寺について

①永平寺三代相論について

『永平寺四世義演禅師の考察』[24]によれば、義介を追逐したのは「円公」なる人物とし、義介は波多野氏の姻戚関係にあると指摘している。「円公」とは寂円もしくはその嗣法をうけた人物と解され、そのバックには宝慶寺檀越の伊自良氏が思い浮かぶ。よって三代相論とは伊自良氏と波多野氏との代理戦争であったかもしれない。寂円派については「2　寂円派の展開」で考察するが、独自の展開をみせており、義演を立てていたように思う。

石川力山氏によれば[25]、義介、義演、義雲と友好的な交流が認められるとし、世に言う三代相論について、果たしてこのような相論が生じたのかと疑問を呈しておられる。しかし「日本達磨宗が無師独悟的性格、無為自然・他力的要素を内包していた。」とし、「懐鑑、懐奘、義介らが達磨宗継承者としての地位を保持した人であったのに対し、義演はすっかり達磨宗を脱皮し得た人ではなかったか」[26]としておられるように、純粋性を重んじた義演は伊自良氏に利用されることを厭うたに違いない。その故に山岳修験地たる白山の越前禅定道の宿坊を兼ねた勝山法恩寺山山上（標高1200m）にある法音（報恩）寺[27]に籠り生涯を閉じた。つまり日本達磨宗とのパイプは生涯堅持しつつも、有力檀越及び取り巻きによる権力闘争に巻き込まれたのではなかろうか。義演はそのような関係をきらって山籠りした、というのが実情だったように思う。

一方、入宋した義介・義伊と国内組の義演などとは必然的に運営や宗教観に違いが生じたことであろう。これらの入宋者が永平寺僧団からの脱皮を図り、自らの教団を確立させていった[28]ことは結果論ではあるがその証左にもなろう。

一方、義介・義伊・義演とも、とりわけ修験に対する受容性は共通して寛容であった。その根拠を挙げることはひとまず措くが、日本達磨宗が叡山別所を巡る天台聖を中心とするグループであったとすることに通じているようだ。

因みに達磨系の法系については、波着寺―澄海・寛海・僧海―の項に掲げておくが、義演の法系は懐奘下か、懐鑑下かが判明していないようだ。

②義演の閑居地

義演が閑居した報恩寺は修験宿でもあったわけで、義演の閑居はある種、修験僧たちの禅兼修の要望をも満たしていたとも考えられよう。

ともあれ義演の行動は、当時の修験者の気風を反映したはずで、突飛な行動ではなかったように思う。

なお筆者は前稿[29]で、義演閑居の地について越前白山禅定道にある法（報）恩寺（法音教寺とも）と佐山法恩寺の二ヶ寺を候補地として挙げておいた。しかしその後、熟慮するうち、当稿のように白山禅定道の法恩寺説に傾いた。

1・3　小松妙覚寺について

面山をして道元真蹟とした「妙覚寺鎮守、十所権現」の木札について、ほとんどはこれを史実として取り上げていない。面山ほどの学識豊富な眼力を認めつつも、天福[1233]元年は辻褄が合わねとて放置している。筆者なりにこの件を検討してみたいと思う。

まず、妙覚寺鎮守の十社権現の木札の文言から見てみよう。[30]「妙覚寺鎮守、奉勧請十箇所権現、第一熊野山、第二日照、第三金峰山、第四賀茂、第五八幡、第六祇園、第七赤山、第八日吉、第九貴船、第十白山、右所奉勧請如件、天福元年四月日、已上」とある。この十社権現の特徴としては、第七赤山にある。円仁（慈覚大師）は入唐して登州赤山法華院に一時身を置いた縁で赤山明神（唐名で泰山府君）を勧請しようとしたことによる渡来神である。また大峰山修験に対して、北嶺修験とも称する叡山修験は、千日回峰行などを行う、円仁の弟子の相応が創始した修行である。千日廻峰行では赤山禅院で最終段階の行が課せられている。以上、赤山神は叡山修験に欠かせない神である。また第三金峰山は蔵王権現社であるし、第八日吉は叡山の守護神であることから、この十社権現は天台修験の神とみられる。結論を先に記すと、「道元帰着後の在京時に、叡山時代の知己の縁で越前天台修験寺妙覚寺の僧に揮毫を依願され、後に道元入越時にこの妙覚寺に止宿した。」以上の経緯であったとすれば無理がないと思われる。

次に妙覚寺及び十所権現について検討しておこう。

まず、妙覚寺については『越前名蹟考』[31]の享保郷帳には小松村が印内村と記されており、妙覚寺の寺内村が原初であったと考えられる。「二百余坊の堂塔と二十五宇の別院」とはいささか誇張し過ぎではあるが、村落地がその旧地であったと考えられる。

また小松村神明神社の由緒には、「近世までは蔵王宮と称し、ご本尊は蔵王権現の本地毘沙門天、右に神明宮天照大神の本地大日如来、左に吉祥天の三体が祀られている。伝説によれば当毘沙門は中村の堂屋敷の山頂（森久町小白山神社の背後の山）にあった。」と記している。[32]

また妙覚寺の旧地は古寺（22字）であった[33]と伝えられ、その地は神明神社の前地であることから、妙覚寺はその宮の別当寺であった可能性が高い。よって「第三金峰山」に該当するように思う。また東南院文書の「大峰七十五扉」[34]に「第十九、妙覚門（四ノ鳥居）」とあって、妙覚は修験に関わる寺号とみえる。

次に「第一熊野山」については小松村の東山麓にあたる清水村に熊野権現社がある。

次に「第五八幡」については大塩八幡が著名である。この別当寺は大塩の西谷の宝光寺であったが、延享の頃廃絶したという。『王子保村誌』[33]には「宝光寺、八幡宮別当、由緒、比叡山行光坊の法流で叡山末二十三ヶ寺の九番席であった。」と記す。また特記すべきは大塩八幡に湯尾峠の疱神の権益を近世まで保持していた点である。大塩八幡と湯尾社との間に特別な関係があった点を指摘しておきたい。また太平記には南北朝期の延元三年（1338）二月の南越平野での戦いで大塩城から山徒三百余騎が討ち出したとあり、修験僧が籠っていた[36]とみられる。

次に「第八日吉」については今宿の日吉神社の由緒[37]に「往古は当村の西方字赤山の峰に鎮座、其頃は数町の神田社家等もあり社殿宏壮なりしと」とあって、「赤山」も地字として残っていた。なお別書に日吉神社は法華勧請にて妙観寺鎮守とあるが、妙観寺由緒に永仁二年真言宗を改宗[38]とあるから、法華勧請は誤りといえる。また赤山は真言系の神ではな

い。また大塩八幡文書[39]に「日吉山王者訳疱瘡之番神可恐神霊也」とあって、疱瘡神は日吉山王神との関係を指摘している。

次に「第七赤山」については前述したが、天台の守護神であり、渡来神である。一説には新羅明神であるという。新羅明神は今庄の藤倉権現のふもとに鎮座している。藤倉権現については『越前国名蹟考』[40]に「古昔は藤倉山鍋倉院東照寺と云天台宗の大坊有之処、叡山より破却の由。今に鐘楼跡、谷々に堂谷仏谷などという字残れり。」とあって、天台修験の拠点があったようだ。

「第六祇園」については上別所に素盞嗚神がある。「第十白山」については鯖波に白山神社があり、明治二十二年の鯖波村地図[41]では山上に白山神社が記されている。以上、小さき社を挙げればきりが無いので割愛する。

以上、天台修験に関わる社寺が妙覚寺以南に集中的にみられる。よって筆者は大塩八幡を入峰口として南進し、ホノケ山を経て藤倉権現に至る修験の道を想定している。なおホノケ山より西方に行ったところにはマンダラ寺の山林寺院跡がある。以上、修験の道の山上峰に一箇所権現がそれぞれ勧請されていたと考えている。藤倉権現は山岳寺院跡として著名であるし、その系列とみられる孫嫡子は疱神として著名であった。その疱神の権益を近世にまで大塩八幡が保持していたことは、大塩八幡と藤倉権現が権益を共有していた名残とも考えるのである。

以上、検討を加えた結果、小松妙覚寺は天台修験の寺院であって、道元入越に一役買ったと考えるものである。なお鎌倉期の北陸道は幾通りもの峠越えがあり、ホノケ山近傍の菅谷峠越え[42]もあった。菅谷峠越えを通過したならば小松妙覚寺は通過経路にあるわけであり、決して奥深い僻地ではないのである。

1・4　日円寺について

①道元の帰洛ルート

建撕記によれば、道元禅師が帰洛の後、京の覚念の居宅で示寂した。その後、覚念は示寂地たる自宅の部屋の柱を越前別印に持ち帰り、塔婆とした、と記している。その示寂を遡る道元禅師の帰洛ルートについて、『永平寺史』[43]では『道元禅師旧蹟紀行』の説[44]をとって「永平寺から宇坂経由で板垣坂、別印、粟田部の経路を通った」としている。しかし両書ともその根拠を記してはいない。ところが『続山々のルーツ』[45]の八ツ杉の項で「道元禅師が帰洛の際、永平寺から宇坂大谷に下り、小和清水、折立を通り、池田の板垣坂を越えて覚念を訪ねられた」との伝承[46]を載せている。板垣坂を越えて別印へ下ったとなると、必ず八ツ杉権現を通過したことになる。八ツ杉もまた泰澄が開いたとの伝承を有する山林寺院であり、八ツ杉権現の名の通り、修験地でもあった。平安末期から鎌倉初期のものとみられる越前国神名帳に正五位八ツ杉神とみえるから、道元在世中には既に存立していたことになる。また筆者は、かって日円寺は八ツ杉の地を支配していたことに加え、後に八ツ杉権現が余呉菅山寺へ退転する時に八ツ杉の地を別印村に託したことなどを論拠として、かっては別印の地は八ツ杉権現の里坊だったとみている。つまり覚念は八ツ杉権現の修験に関わる人物でもあったとみている。このことの是非はともかく、道元の通行に際し、泰澄の開いた社寺を参拝し、別印の覚念の居宅を訪うたとみられる。このことからも

道元の修験に対する態度の一端を窺い知ることができる。なお、余談ながら道元帰洛ルートには、宇坂大谷、板垣坂、木の芽峠、等々の多くの峠越えがある。寺僧の随行があったとは言え、病身の身であるからして、峠越えはおろか陸路歩行さえおぼつかない様がみえるのである。筆者は修験者のバックアップがあったからこそ、帰洛が可能になったと思えてならない。

②日円寺の草創について

日円寺は越前市別印町にあった五山派の諸山で、越前の利生塔があったとされる寺院である。

前記の通り、覚念が道元の塔婆を建てた地でもあった。日円寺の草創についてはほとんど不明であるが、覚念の塔婆設立が日円寺の草創であるとの説もある。しかし日円寺の寺号からみて、その前身は密教系であるとみられる。また別印の小字・法界門には八杉権現の一ノ鳥居があったとの伝承などからみて、妥当な説とは認め難い。

筆者は前稿[47]で山上にある八杉権現の所在との関連を指摘し、八杉権現関連寺院の禅宗化説をとっている。しかし何の物証がある訳でないが、修験系による可能性を指摘するに留めたい。

1・5　日野権現の開山塔

日野山北面中腹の標高３００ｍ地点にある「大寺」と呼ばれる山林寺院遺跡がある。当地に越前市指定文化財の自然石塔婆の開山塔[48]がある。この塔婆ならびに塔婆群から当地への禅宗導入について探ってみたいと思う。

①日野山大寺自然石塔婆群から得られる知見

イ、自然石の板碑に重制無縫塔が陽刻されており、禅宗系の塔婆である。

ロ、重制無縫塔の塔身は頭部が著しく外に張った関東系の形でなく、円形で古式の関西系の無縫塔であることから、鎌倉末期から南北朝期にかけてのものであること。

ハ、無縫塔の棹部に開山と三十三の文字が読み取れることから、開山塔で三十三回忌に造立されたようだ。

ニ、自然石に五輪塔が陽刻され、水輪部にバの種字と二世の文字が刻された塔婆があり、五輪塔の両側に近江系の双式華瓶付きの三茎蓮が陽刻されている。当寺第二世の塔婆とみられる。

ホ、同一様式の華瓶付き三茎蓮は開山塔の無縫塔の両側にも陽刻されており、同一工人の手による製作とみられることから、開山塔と二世塔は開山禅師の三十三回忌と同時に造立されたようだ。

ヘ、開山塔が禅宗の無縫塔様式あるのに対し、二世塔は五輪塔にバの種字が彫られた形式であることから、開山禅師は兼密禅を修していたとみられる。

（ト）、双式華瓶付き三茎蓮は田岡香逸氏の研究によれば、室町初期の近江系の工人により製作された可能性が高い。この点については別項で詳述する。

なお、自然石塔婆群の所見については、７・２項に記しておく。

1・6　日野山崇禅々寺

①崇禅寺の文献の検討

日野山西麓にあった崇禅寺に関わる文献について検討してみたい。

斯波高経判物[49]

崇禅寺事、為当家御祈祷所、可被致精誠之状如件、

暦応五年二月廿五日　修理太夫（斯波高経）（花押）

崇禅寺方丈

とあって、越前国守護の斯波氏の御祈祷所に指定された。この崇禅寺は日野権現社の別当寺であったと考えられ、次の資料を検討してみたい。

日野神社神輿修造牌[50]

大日本国越前州従徒部郷平葺保

奉日野大権現　神輿修造之畢

大檀那山門西塔北谷住権大僧都法印掟運

日野山崇禅々寺住持比丘周芳判

老祝　彦左衛門盛家

大工　三郎左衛門家次

于時大永二年仁午七月二十五日

この文言から次のような知見が得られる。

イ、寺号と住持名から禅宗寺院であること。

ロ、大檀那は叡山西塔北谷の□院であること

ハ、日野社の神輿は崇禅寺の所有であること

よって崇禅寺は日野権現の別当職に任じられていたとみられる。平安末期から鎌倉初期成立の『越前国神名帳』には従一位日野大明神と記される泰澄開基の社であった。この社の別当寺の成立も、鎌倉期を下らないと考えられる。そしてその所属先は比叡山であった。然るに暦応年間までに寺号が禅宗のそれに変わり、住持も臨済宗夢窓派が用いる法諱の周を名乗っている。しかも大永年間に至っても檀那は比叡山であった。つまり台密の兼修禅を行う寺院であったことが知れる。

また崇禅寺は延徳三年（住持周慶）や天文十九年に池上保内の権益を有していた文書[51]が残っている。

思うに修験僧を多く擁した寺社が禅を取込むことによって武家層を取込んだものと考えられ、前項の日野大寺ともども修験による兼密禅が持ち込まれた。そして叡山側にとっても、武家層に信任が厚く、寺領経営に長けた禅宗僧を受入れたほうが得策だったのではなかろうか。このように台密寺院が比叡山から圧迫を受けずに禅宗を取込むことに成功したのではないだろうか。

②崇禅寺の属性の検討

崇禅寺の草創期を検討してみたいと思う。

崇禅寺が斯波氏の御祈祷所となる以前、既に兼修禅の寺院となっていたように思う。その根拠として、

イ・日野社は延喜十年九月に従五位下を受けた古社であり、早い段階で神宮寺が置かれていたことと考えられること。

ロ・鎌倉期には大陽義冲・無徳至孝など平吹出身の東福寺の禅僧を輩出している[52]ことから、当地から東福寺登住に至るパイプがあったと考えられること。

後の南北朝の戦いで南朝側の平葺城（陣）があったことからみて、恐らく当地の日野社は南朝側に味方したようだ。それは鎌倉末期に平吹は国衙領であったから、鎌倉御家人の支配地であったようだ。その為、旧体制派として行動をしたのではなかろうか。

なお、荒谷は安楽寿院領西谷庄に含まれていたようだから、日野大寺も東福寺の禅を取込んだように思う。

崇禅寺が斯波氏の御祈祷所となった以降について、延徳・大永年間には法諱の系字周を持つ住持であることから夢窓派末に転じていたように思う。

1・7　越前国神名帳にみる修験社寺

神名帳から修験系とみられる神名を挙げ、

筆者なりに山林社寺の比定地を記してみた。神名があっても山林社寺跡が掴めていないもの、山林社寺跡があっても、神名がわからないもの、等々比定に至る事例は極限られている。今後とも山林社寺の発見、並びに地名からの比定に取り組みたいと考えている。

越前五山と称される白山・越智山・吉野ヶ岳・文殊ヶ岳・日野山に注目してみると、吉野ヶ岳の神名が見当たらない。恐らく生江氏の氏神に押されて発展を遂げなかったのかもしれない。このことは道元がこの地に入り込めた因子であったように思う。

日野神については今立郡に記載がある。しかし崇禅寺は日野山の別当であり、その所在は従徒部郷平吹であるにも関わらず、丹生郡ないし敦賀郡に見出せない。郡を跨いで所在する神名は一つに纏められたと考えられる。つまり当神名帳は神名を記したものであるから、日野山の西と北にそれぞれ別当があったにも関わらず、山上におわす日野神は一つであった。

道元ゆかりの禅師峰については禅師神子神、義演閑居の寺院については報恩寺山祭山王神が見出せる。また白山の越前禅定道では前出の法恩寺のほかに雉神が見出せる。

郡名	神階	神名	山林社寺
大野	正一位	白山大明神	
大野	正五位	禅師神子神	
大野	正五位	報恩寺山祭山王神	報恩寺山山頂
大野	正五位	雉神	雉子神跡
大野			伝大仏寺跡
大野			大光寺跡
丹生	正一位	越智三所権現	越智山山頂
丹生		越智三所権現	太谷寺山頂
丹生			高雄権現高雄山
丹生	従五位	気多神子伊須留岐神	
丹生	従五位	鍬懸神	
足羽	正一位	二上大明神	
足羽			吉野ヶ岳山頂
足羽			波着寺跡
今立	正一位	剣東院羽咋村岡大明神	
今立	従一位	大瀧大明神	大徳山山頂
今立	従一位	日野大明神	荒谷大寺跡
今立	正五位	八杉神	八杉権現八杉峠
今立	従五位	禅子神子神	
今立			河和田禅定山
今立			高源寺・稚児権現
坂井	従五位	鍬懸神	
敦賀			今庄藤倉権現

1 大法輪五十六巻十一号(平成元年十一月号) p86
2 平泉寺大縁起 平泉寺白山神社蔵
3 越前若狭地誌叢書 上巻 越前地理指南 大野郡 大渡り村 p89
4 大野市史 諸家文書編1 土蔵市右衛門家文書 p473
5 日本方言大辞典 尚学図書編 小学館 上巻 p468
6 前掲4に同じ
7 新訂 越前国名蹟考 杉原丈夫編 p443
8 仏教芸術294号(2007.9) p84
9 傘松 第526号(1990.3) 白山信仰と曹洞宗教団史
佐藤俊晃著 p20、同528号(1990.5) p15
10 新道元禅師伝研究 中世古祥道著 p159
11 道元禅師伝研究 正 中世古祥道著 p376 p378
12 永平寺史 上 p117
13 宗学研究 第21号 昭和54年 道元禅師と檀越波多野氏について 関恒久著
14 禅宗の地方発展 鈴木泰山著 p41~42
15 宗学研究 第29・30号 道元僧団の社会的性格—永平寺住侶制規の史料的検討— 菅原昭英著
16 宗学研究 第30号 道元禅師と北越移錫の真相—禅師の決断と白山天台の影響 守屋茂著
17 宗学研究 第38号 平成8年 大仏寺移転論・非移転論・永年葛藤の根源を切る 郡司博道著
18 永平寺史 上 p291
19 3・1日本達磨宗①波着寺の項

20 1．5日野権現の開山塔　及　1・6日野山崇禅々寺の項
諸本対校　永平開山道元禅師行状建撰記　河村孝道編　p50

21 傘松　第528号（1990．5）p16

22 道元禅研究　伊藤秀憲著　p409

23 曹洞宗研究員研究紀要　第20号　永平寺四世義演禅師の考察　その1　金子和弘著　曹洞宗宗学研究所紀要　第2号　永平寺四世義演禅師の考察　その2

24 義雲禅師研究　義雲禅師伝の研究　p182

25 曹洞宗研究員研究紀要　第20号　永平寺四世義演禅師の考察　その1　金子和弘著　p164

26 福井県歴史の道調査報告第5集　白山禅定道（越前禅定道）法音寺跡　p103

27 宗学研究　第32号　義介・義伊と入宋問題　佐藤秀孝著　P156

28 若越郷土研究第51巻2号　三里山を取り巻く泰澄開創社寺について（上）　拙著

29 諸本対校　永平開山道元禅師行状建撰記河村孝道編　訂補本・補注　補39 p145
なお「第二日照」については「ひでり」と訓ずるのかどうかも含めて今後の課題としたい。

30 新訂　越前国名蹟考　杉原丈夫編　p175

31 ふれあいの町王子保　p189

32 南条郡神社台帳等の裏付け記事は確認できなかったが、貴重な伝承である。

33 武生の伝説　武生市立図書館編　道元禅師自作の木造　p9
王子保村誌　妙覚寺 p655
なお22字古寺の西方に面した山地26字野ヶ谷の山麓も通称古寺と言い、奥行き30m・幅35mほどの開削平地が残っている。その谷には幅15m・奥行き150mほどの開削平地が遺存している。妙覚寺の旧地と云われている。

34 修験道修行大系　p300

35 王子保村誌　宝光寺　p655

36 因みに平泉寺僧徒が味方し三峰から打ち出している。この戦いで僧徒が打ち出したのは三峰寺と大塩城のみであった。旧暦二月十一日であることから冬越ししていたとみられる。三峰には山林寺院三峰寺があり、ここで冬越しが可能である。大塩城に山徒が山居していた訳だが大塩城の構えはとても冬越し出来る規模ではなく、山麓にある大塩八幡の社寺地に籠ったものとみえる。

37 福井県南條郡誌　p892

38 同前　p894
筆者は頭に妙を置く寺号は法華宗と思い込んでいたが、南条郡域には妙法寺、妙覚寺、妙観寺と法華宗による寺号ではない寺院が多い。この点も今後の課題としたい。

39 同前　p1072

40 新訂　越前国名蹟考　杉原丈夫編　p158

41 福井近傍之図　鯖波村　二万分の一　歩兵第七連隊　明治二二年

42 越前若狭峠のルーツ　上杉喜寿著　p65
越前若狭歴史街道　上杉喜寿著　p132
幻の北陸道として府中、大塩、瓜生野、菅谷坂、菅谷、大谷坂、元比田へと通じている。俗称、塩の道という。
府中から元比田までほぼ直線状にあり、最短距離の峠越え道である。

43 永平寺史　上　p147

44 増補修訂版　道元禅師旧蹟紀行　小倉玄昭著　p367

45 続山々のルーツ　上杉喜寿著　p226

46 上杉喜寿氏に当伝承についてお訊ねたところ、「昭和三十年に当時の永平寺貫主（熊沢泰禅師）よりお聞きした・また永平寺門前や月尾谷でも同様な話を聞いた。」とのことであった。なお上杉氏は当時、志比小学校の教諭を努めていた事もあって、吉峰寺から大仏寺への山上コース開発を依頼され、その成就を喜んだ貫主から、出入自由の栄誉を受け、さまざまな記録や伝承等についても教示をうけた、とのことであった。
また余談ながら、上杉氏の母の実家が永平寺門前七人衆矢野茂左衛門であったことから、門前に伝わる伝承を幼少時より母から伝えられた。
血脈池の伝承について、「波多野氏の娘が道元禅師に恋慕したが、僧籍にあるため添い遂げることができないことを悲しんだ娘が血脈池で自

害した。道元禅師は当地でその霊を弔った。」と、流布される伝承とは少し異なるので記しておく。その血脈池では道元伝承地であることから、母と共に湖畔に蚊帳を吊って野営したこともあった。また剣岳にも道元止宿伝承があった。この伝承は吉峰寺や下志比に伝わっていた。

47 若越郷土研究　第49巻2号　室町期越前の五山派寺院について　拙稿

48 武生市の文化財　p107

49 福井県史　資料編2　中世　p709

50 福井県南条郡誌　p76

51 福井県史　資料編2　中世　p608・612

52 延宝伝灯録には両者を越前州藤氏とある。扶桑禅林僧宝伝には太陽は筑前藤氏、無徳は越前平葺藤氏とある。五山禅僧伝記集成　無徳至孝には越前藤氏　p644

2　寂円派による展開

・はじめに

寂円は道元をしたって来日し、その後、永平寺二世となった懐弉に嗣法した。その懐弉は日本達磨宗の嗣法だが、道元に嗣法を改めた。よって寂円の嗣法は三系の混合と言えよう。その寂円は道元示寂後に宝慶寺に引いて、独自の展開をしたように思う。

2・1　越前国安国長楽寺について

①長楽寺

『義雲和尚語録』[1]には「長楽開山円機和尚下火」とあって、永平寺五世義雲は長楽寺開山円機和尚の下火（あこ）、つまり葬儀の際に導師が火葬する意をあらわす所作を行ったと記されている。下火を執り行うからには長楽寺は永平寺の近傍の地に所在したと考えられる。また義雲和尚語録に記された小仏事を行っているのは一門の人物か、檀越とに限られており、円機は一門の人物とみなされたように考えられる。『足利義詮御教書』[2]に

先年回禄之後、無指再興、今者廃寺也、難対揚云々者、為両庄兼帯之地頭、度々吹挙難棄捐之上、両寺之用捨非無其謂之細見状所、然則改長楽寺、以永徳寺可称越前安国寺之状如件。

康安二年八月十七日　　左中将（花押）

当寺長老

とあって、長楽寺は越前安国寺であったが、焼失し、長く再建されないので、康安二年（1363）に永徳寺を越前安国寺に指定されたとある。さらに『長楽寺東寺修造料足奉加人数注進状』[3]によれば

（端裏書）吉水寺　川和田　今北東

越前国　今北東郡　河和田庄

吉水山　長楽寺

東寺御修理奉加之人数

華蔵坊、高乗、宗範、重祐、能祐、以上

文安二年乙丑八月十三日

文安二年（1445）に東寺修造料足に吉水山（吉水寺とも）長楽寺が河和田（福井県鯖江市河和田地区）に所在し、料足を出したことが知れるのである。つまり義雲が下火を執り行った長楽寺開山円機の住した地は河和田であった。しかし残念ながら長楽寺の所在地は特定できていない。

また石川力山著『義雲禅師伝の研究』[4]には

東隆真著『宝慶寺寂円禅師』を引いて「義雲和尚語録の編者円宗・空寂の二師はその名からして寂円禅師の弟子ともみられており、小仏事の長楽開山円機和尚下火の円機なる人も寂円禅師の手度の弟子である可能性が大きい。」と記し、また「その法語は…長楽開山円機和尚、祥栄侍者等の出家者の下火入骨の仏事法語が収録されている。…さらにこの法語は義雲和尚が直接葬儀を執行したことを示しており、永平寺あるいは宝慶寺の近隣に在住していたことが知られる。」とある。

円機は寂円の法諱系字の円でないかとし、小仏事を行っているのは一門の人物か、檀越かに限られていると記している。もし円機が寂円の徒弟であるならば、寂円の生前に徒弟となったのであり、その後、長楽寺の開山となったことになる。長楽寺の寺号からみて白山密教系の寺院であったとみられるが、円機を長楽寺開山とした時点で禅宗に転じたと考えられる。そして他国の事例からみて越前の騒乱が終息しつつあった暦応三年前後の永平寺六世曇希在住時に長楽寺は越前安国寺に指定されたようだ。しかし程なく長楽寺は焼失し、長く再建されなかったようだ。そのため永徳寺に此山妙在を中興開山として迎えた上で越前安国寺に指定したようだ。

何故、長楽寺が長く再建されなかったのかについて考察してみたい。越前での南北朝の戦いが漸く終息した時代であり、北朝側の檀越も新秩序を構築するのに手一杯で、再建に手を貸すゆとりがなかったことであろう。また寂円開山の宝慶寺檀越の伊自良氏は南朝側であったようであり、わが身を立てるのに精一杯ではなかったろうかと考えられる。一方、比較的安定だった美濃に拠点を持つ此山妙在に永徳寺再興を働きかけたように考えられる。ただし伊自良氏は貞治4年（1365）の沙弥円聡の寺料寄進状[5]では「故将軍家長寿寺殿」とあって、つまり足利尊氏の菩提もあわせて祈願し、寺領を寄進する幕府側の外護者に変わるなどの変貌を遂げている。

②長楽寺はどこか。

『越前誌』[6]には

尾花デンジヤウ（殿上）に七堂伽藍有。十三村の惣社也。礎今も有。中村に鳥居跡有。今は尾花と沢と河内の地内三社ヶ森が惣社也。祭三月九日九月九日也。

とある。河和田の尾花の殿上山（禅定山・標高683m）の150mほど下方の山上には広大な山林寺院遺跡が存在する。おしむらくは現状は尾花キャンプ場として造成されたため、遺跡の過半が破壊されてしまった。しかし残る状態からみても広大な修験寺社が存在したことは明らかである。また前述のように、修験社寺は禅宗を取込むニーズがあったわけで、当殿上山の修験も禅宗を取込んだであろうことが推定できる。その麓には曹洞宗能仁山長禅寺がある。由緒[7]では

長禅寺ハ文明年間朝倉敏景居城セシトキ禅僧ニ義梵ト云フモノアリ常ニ禅宗ノ奥義ヲ説ク敏景之ヲ信ジ蘭若一宇ヲ造営シ其山ヲ能仁ト云ヒ其寺ヲ長禅寺ト号ス此地ヲ名ケテ禅定ト云ヒ以テ彼梵和尚ニ興フ和尚受テ以テ之ニ住ス後朝倉義景織田信長之為メニ繫攻セラレシ時災火ニ羅カリテ堂宇ヲ焼失ス後移転シテ今ノ地ニ造営ス今ノ長禅寺ハ即チ是ナリ。義梵和尚当山開祖唄庵義梵禅師ハ（中略）康暦庚申ノ春笈ヲ負ヒテ京師ニ上リ顕密講師ニ

学ブ（中略）即チ去テ洞済諸老宿ノ門ヲ扣ク（中略）応永二十五年春門人越ノ国ニ至リ河和田荘ニ一ノ坊舎ヲ建立シ名ツケテ長禅寺ト云フ禅師ヲ進テ第一祖トナス（中略）清平ナル者信仏崇徳ノ者ナリシガ不思議ニモ境内ノ池ヨリ光明輝キタシ清平驚キ急ギテ其池ノ辺ニ臨メバ池ノ中ヨリ彩雲棚ナ引キテ一体ノ尊像現出シ給ヒ（後略）

とあって、興禅寺の不見明見の徒弟の唄庵義梵が応永二十五年（1418）に殿上山の山上に建立し、天正の争いで焼失し、その後、山麓の現在地に創建したとある。広大な山林寺院跡が曹洞宗の寺院跡とは不審である。

むしろ河和田庄が真言宗御室派の仁和寺領だったことに関わる寺院の存在があったことを窺わせる。また山号の能仁山は日本達磨宗の宗祖能忍（仁）[8]を想定できるし、長楽禅寺の楽を欠いた寺号ともみられる。何か伝承等があって、このような山号寺号をとったとも考えられる。

安国寺の選定にはそれなりの格式があって、南北朝の戦いで被災していなかった寺が選ばれたように思う。こうした観点でみれば、鎌倉末期に河和田庄は仁和寺領であり、南北朝の動乱期には足利方の武家が支配し、文明十年ごろから仁和寺領に復した。[8]こうした背景と山上にあったこともあって、被災せずに存立していた可能性が高いと考えられる。

なお、長禅寺の応永二十五年（1418）の創立と文安二年（1445）東寺修造料足にある長楽寺について、別寺とみるか、同一寺院とみるか、見解が分かれよう。仮に同一寺院とみた場合、兼密禅の寺院を建立して、密教系寺院にあてがわれた東寺修造にも応じたとも考えられよう。この唄庵は初めは密教を学んだ後に不見下に転じたとあるから、有り得ないこととは断じられない。なお村誌の唄庵来歴の記述は、日本洞上聯灯録の唄庵の記述に一致する以上に詳しく、寺伝来の履歴であったのだろうか。

因みに、由緒にある清平云々の池は閼伽井の池の存在を窺わせる記述とみたが、金谷の積成寺跡に関わるものが長禅寺由緒に混入したものであった。[9]

③再建後の長楽寺の規模

東寺修造料足の比較によって文安二年（1445）の長楽寺の規模を探ってみたい。

越前国寺々奉加[10]

篠尾	大惣持寺	四十六人	五貫文
	三峯寺	十四人	壱貫六百文
佐山	法恩寺	三人	壱貫五百文
	大瀧寺	参拾人	参貫文
	楞厳寺	十人	壱貫文
	波着寺	六人	六百文
	吉水寺	五人	五百文
	朽飯寺	七人	七百文

とあって長楽寺（吉水寺）は波着寺・朽飯寺と同格のようで、再建後は振るわなかったようだ。

なお波着寺は近傍地にある大惣持寺にかなり圧迫されていたようだ。

2・2　寂円の妙法寺開山

妙法寺は越前市妙法寺町にあった五山派の諸山位の寺院である。『延宝伝燈録』[11]に

越前州薦福山宝慶寺寂円禅師。（中略）越州藤氏建宝慶寺。請師為第一世。又開妙法寺。住職不久。遘（遇）病而化。

とあって、寂円は妙法寺を開いたが住するまもなく病に倒れたとある。

筆者はこれまで、この記述を懐疑的にみていたのだが、前項の長楽寺を思考するうち、寂円の活動の一端を知るにつけ、再考する必要を感じてきた。つまり密教系たる長楽寺を寂円の法嗣たる円機をして禅宗化させている訳で、妙法寺も同じ様な寂円の活動とみて取れるのである。

しかし長楽寺が越前安国寺に指定されたあと、まもなく焼失し、その後、禅宗が廃され、元の密教系寺院に戻っていった。このように妙法寺も早い段階で寂円派を離れ、鎌倉大慶寺の秋澗道泉の手に移っていたようだ。

1　曹洞宗全書　語録1　p19
　日本の禅語録4　義雲　篠原寿雄著　p268
2　福井県史　資料編2　中世　p710
3　福井県史　資料編2　中世　p154
4　義雲禅師研究　義雲禅師伝の研究　石川力山著　p175
5　永平寺史　p288
6　越前誌　坂野仁蔵著　越前市中央図書館蔵　庭本文庫本
7　今立郡河和田村誌（毛筆書）　明治三十一年著者不明
　鯖江市立図書館蔵（複写本）
8　釈迦のサンスクリット語の漢訳を能仁と記す。あるいは、これを採ったかもしれない。
8　鯖江市史　通史　上巻　p230
　福井県史　資2　仁和寺領　p396・新河和田庄p657
9　鯖江郷土史懇談会会誌　十一号　釈導寺伝説を読み解く　青木豊昭著　p3
10　福井県史　資料編2　中世　p154・156
11　大日本仏教全書　延宝伝燈録　第一　p118

3　京洛からの禅宗導入

3・1　日本達磨宗

近年、日本達磨宗の三宝寺に関わる新出史料が見出され、「能忍が開いた三宝寺は叡山の別所的存在といわれ、日本達磨宗は能忍を始祖とする天台聖を中心とする一グループであった。」とする見解[1]が示された。また「吹田中島三宝寺は水運に関わる人達の居住地、あるいは乳牛を飼育した牧があったり、近くには遊女で著名な江口がある地にあって」[2]、案外世俗的な宗旨のグループであったとも言われている。「波着寺も別所聖を中心とするグループで、叡山の末寺的存在であったかもしれない」[3]、との見解が示されている。筆者なりに波着寺の検討を進めてみたい。

①波着寺

道元下に集団で投じた日本達磨宗の懐鑑の拠点であった波着寺は、福井市成願寺町の山上にあり、当遺跡については近年調査報告[4]が出され、その遺跡の全容が明らかとなった。

また「延暦寺灌頂行事」[5]の奥書に「文永八[1]年正月二十四日以小河殿御草本写了、於越州波寄（なみつき）搓浪書了」とあって、波着寺で書写され

たもので、義介が大乗寺に移る以前においても、波着寺は比叡山ともつながりの深い天台系寺院であったことが明らかとなった。

なお応永二十一年[1414]の瀧谷寺門徒次第には波着寺名が無いもの[6]の、記年を欠くが戦国末期頃には波着寺は観音御開帳に瀧谷寺から導師を迎えており[7]、どうもこの頃には波着寺は真言宗瀧谷寺末に転じていたようだ。

思うに瀧谷寺は現在でも修験行事を執り行っているところから、当時、既に天台修験の衰退があって、波着寺は真言修験の瀧谷寺末に転じていたのではなかろうか。

以上、みてきたように波着寺は山上の山林寺院であって、近世には真言宗滝谷寺末に転じたことをみても、修験寺院であったことが濃厚にみてとれる。

なお波着寺は天正期に戦禍に遭い、足羽山に移転再建され瀧谷寺末となっていたが、幕末に廃寺になった。一方、前田利家も金沢城内に波着寺本尊の十一面観音を移し、後に金沢市石引町の波着寺を再建した。この金沢波着寺に澄海の位牌を発見し、義介との関係が明らか[8]となった。

②澄海と寛海と僧海について

澄海の位牌の文面[9]をみてみたい。

当寺越前にて波着寺先住大乗寺開山

ア（種子）　法灯大阿遮梨法印澄海不生位

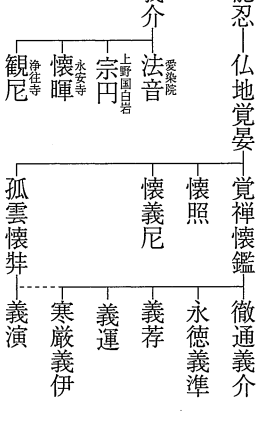
徹通和尚師匠也　九月十五日

胎蔵界大日の種子「ア」を配し、「大阿遮梨法印」と密教系の位階となっている。この文面では澄海と義介のどちらが師にあたるか判然としない。大方は義介を師としているが、澄海が義介の嗣法をうけたとすれば、何故、澄海は道元下に投じなかったのか、違和感がある。いずれにしても確たる物証はない。澄海は義介の師か、あるいは師弟または師兄の誤伝の可能性も考えられよう。ともあれ、澄海は道元下に投じることなく、台密系の法系で通したか、日本達磨宗たる別所聖か、のいずれか不明ながら、真言宗大乗寺に請じられたと考えられる。

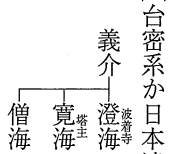
一方、懐弉下で正法眼蔵の古鏡、観音等の多くの道元著作の謄写を行ったことでも知られる寛海は『義雲和尚語録』[10]にある「寛海塔主下火」とあって、義雲住する永平寺の塔主として建治元年[1275]に示寂した。

また仁治三年[1242]に僧海首座もまた若くして夭折した。以上、澄海と寛海と僧海は共に法諱系字の海を有している。そして澄海は波着寺で修したようであることから、寛海と僧海も波着寺の出自であったと考えられる。ここで日本達磨宗の系図を挙げておく。図のように達磨宗の義介下の法号と、澄海・寛海・僧海が法号の下字を系字としていることなど、あきらかに違いが認められる事から、筆者は台密系の嗣法の可能性が高いとみている。この推定が正しければ、澄海の行動をして、台密系の僧達の行動やその背景が垣間見えるように思う。

［日本達磨宗］



［台密系か日本達磨宗系か不明］



③まとめ

以上みてきたように、波着寺は全山を挙げて日本達磨宗に転じたわけではなく、むしろ台密系寺院に止宿を許されていたようだ。そして澄海は真言大乗寺に義介を招いたとする点からみれば、澄海等は別所聖であったとみられる。よって波着寺の懐鑑下の日本達磨宗の面々が総じて道元下に投じた訳でもなく、澄海や懐暉など別所聖のまま行動していた僧もいたと考えられる。また波着寺に別所聖が止宿したとなれば、その修験地は近傍の吉野ヶ岳に相違なく（吉野ヶ岳山頂から、南下し波着寺近傍に通じる山道が現存している点からみても）、1．1項で記した筆者説も荒唐無稽の説でもなかろうと思えるのである。さらに波着寺の所在する福井市成願寺町は足羽川脇にあって今立・足羽・坂井平野の東麓を通る北陸道裏街道の渡し・宿場[11]の近傍地である点を見逃せない。この交通の要衝たる地に所在した点は三宝寺の立地に通じるものがあり、別所聖が生活の糧を得る好適地であった。なお波着寺の草創について、泰澄開基の一乗谷所在の一乗寺が移転したとの説[12]がある。その真偽はひとまず措くが、その伝承地一乗山（標高741m）と前記山林寺院跡河和田禅定山とは隣り合う峰続きであることから、波着寺は同地グループからの分派であった可能性がある。とすれば、寂円派が長楽寺へ触手を伸ばした背景がしのばれる様に思う。

3・2　弘祥寺の創立について

弘祥寺の由緒については以下の二本がある。

A　弘祥寺由来書[13]

由緒書　弘祥寺

当寺は人王九十代後宇多院御宇弘安元年亀山法皇様之勅願ニテ御創建ニ御座候、依之弘祥護国禅寺之勅額被仰付候。本尊薬師如来は春日之作ニテ霊験之尊像なり、暦応年中兵火ニテ諸堂不残焼失致し候、薬師如来のみ残り候、康永元年当国黒丸之城主朝倉孫右衛門広景当寺を再興し、別源禅師を請テ開山とし薬師如来を本尊と成す。（後略）

B　覚　足羽郡寺下村　大冶山弘祥寺[14]

一　宗旨禅臨済宗本山京花園妙心寺本末之訳合

寛文年中大安寺黙印和尚ヲ請シテ致再興候。依之大安寺同様妙心寺末寺ニ相成候。右之外ニ訳合無之候。

一　本尊釈迦如来

右元禄七戌年安置是迄薬師如来本尊候

一　当寺は康永年中朝倉右金吾美作守広建立也。別源円旨和尚ヲ請シテ開山トス大将軍義詮公御帰依ニテ弘祥寺ヲ以位ヲ諸山ニ列シ開山ノ道徳ヲ重ンス。且又亀山法皇ノ勅願寺トなし給ふ。右朝倉実録二見えたり。又名鑑ノ図ニ十刹ノ内ニ載之（後略）

A本には、弘祥は弘安元[1278]年の亀山法皇の勅願により創建され、弘祥護国禅寺の勅額が下賜された。しかし暦応年間に戦禍にあい焼失した。その後、朝倉広景によって再建され、別源円旨を開山に請じられたと記している。亀山法皇創建については別資料『越前若狭一向一揆資料集成』[15]に弘祥寺・大安寺の位牌が

列記され、「大非咒　亀山大上法皇　尊儀」とあって、A本の記述に符合する。

B本にも亀山法皇勅願寺とあるものの、時代の錯誤がある。よってA本をとることとしたい。

文献資料[16]でも嘉元(1305)三年には亀山法皇の愛妾讃岐局藤原寿子が安居郷を知行したことが知れるので、A本の草創記事は事実であった可能性がある。しかし亀山法皇は大覚寺党であるから、暦応(1338)年間に焼失したその寺の領地は没収され、朝倉氏が没官地を手に入れたと考えられ、朝倉氏のもとで弘祥寺は再興された。

亀山法皇が創建した弘祥護国禅寺とはいかなる寺院であっただろうか、この点を考察してみたいと思う。文正(1466)元年に安居は一条家領となっているが[17]、早くから一条家は足羽御厨の別納として安居保とよんで関心を寄せていたところをみると[18]、一条家がそれなりの関与をしていたとも考えられる。また南禅寺は正応(1291)四年に亀山法皇が東福寺の無関普門を開山に請じて創建した。この例をみるように皇室や公家は東福寺を信奉していた様であり、弘祥寺は東福寺系の僧が開山に請じられたように思う。

因みに『越前国名蹟考』[19]には「亀山　大渡ノ上北方ニ亀山院御陵移シタル迹ノ由、三十三間四方ノ所有。鎮守観音堂安置之。素良按るに観音堂より少し西南に石祠あり。観音を彫、上に真覚上人、真海上人、真光上人とあり。」などとしながら、亀山院御陵移転説、弘祥寺開基説は付会の説としている。

明治二十二年歩兵第七連隊作製の福井市（二万分の一）の地図[20]には下市村に亀山社が記されている。

因みに文安(1445)二年の東寺修造料足奉加帳[21]には大惣持寺末として安居寺がみられるが、当時は既に曹洞宗宏智派の弘祥寺は存立しており、この弘祥寺と安居寺とは係わり合いがない寺院とみられる。

以上、手掛かりとなる資料が限られており、勝手な想像は控えることとしたい。

次に別源が弘祥寺に入った理由について考察してみたい。越前では北朝は安国寺を長楽寺に、利生塔を日円寺に指定した。いずれも国府近傍にある旧仏教系寺院であった。越前守護斯波氏は平吹崇禅寺を御祈祷寺とし、弘祥寺再建より遅れて別源をして善応寺を創建した。これらも国府近傍である。しかるに別源は国府より離れた地点で、しかも斯波氏の被官に過ぎない朝倉氏の支配地たる安居に拠点を置いたのかを考察してみたいと思う。

開明派の別源の眼には安居の地がとても魅力的に写ったのではないか。つまり外港たる三国湊に内水運で通じている立地条件に着目したと考える。別項でも記したが、宏智派は肥後にも拠点を置いており、布教と交易を視野においていたに違いない。当地は国府とは離れてはいるが、国府と外港三国湊を内水運で結ぶ川沿いの沿岸にあって、九頭龍川、足羽川、日野川、浅水川の合流点近傍にある。また渡し場ともなる陸運の要衝地であり、物流や情報通路でもある。結果的にこの着眼点は室町期を通じて活かされ弘祥寺は隆盛を誇ったのである。

また、当地は足羽川、日野川、浅水川の合流点にあって、寺前は悠然とした流れが広がっている。そしてその前面には白山連峰が望める風光明媚な景勝地である。詩文僧として

の寺地選定の重要な要素であったように思う。因みに次項に記す崇聖寺開山の天境も詩文僧であり、その立地は弘祥寺のそれに似ている。後世に当地は大野における風流人が集う場所であったことは、崇聖寺のこうした立地要件の継承であったように思う。

3・3　五山派

①五山派との関わり

越前の五山派寺院として、十刹弘祥寺（安居）、諸山安国永徳寺（所在地不明）、日円寺（利生塔・別印）、妙法寺、善応寺の五ヶ寺があった。

弘祥寺は前述のように亀山院の創立と伝えられるが、南北朝期に別源をして中興開山として請じられ、越前の曹洞宗宏智派の拠点となった。また別源は建仁寺内に洞春庵を開き塔所とした。そして洞春庵は京都における宏智派の拠点となった。また別源により越前善応寺が開かれ、寺内の可休亭で詠んだ詩文は著名である。

永徳寺は義準により東密寺院として創建されたが、後に秋澗により禅宗化し、大休正念を開山に請じた。その後、幕府は此山妙在を

して長楽寺に代えて越前安国寺に指定した。以降、此山下が終始支配した。

妙法寺は初め寂円によって禅が持ち込まれたが、次いで秋澗により大休正念を開山に請じた。南北朝期以降は夢窓派に転じたようだ。

日円寺の創始は不明であるが、永平寺開創檀越の一人の覚念の故地にあった。仏光派の高峰顕日下の夢窓・此山と同門の北翁妙済が入り、四伝したようだ。後に夢窓派となった。

②詩文僧による導入　崇聖寺（天境霊致）

『東山歴代』[22]の天境霊致の項には「開越前雪峰山崇聖寺。日工集下。永徳元年十一月十八日下ニ。」とあって示寂直前の創立であった。天境は詩文に堪能で同輩は此山（永徳寺の開山）、石室、義堂がいる。特に別源の法嗣玉岡とは水魚の交をしていた。

崇聖寺の所属派を探ってみよう。天境は大鑑派に属していたが、晩年になって雪村友梅率いる一山派に転じた。よって開創時の崇聖寺は一山派であったと考えられる。弘治年間の崇聖寺の住持は法諱が宗であるから一山派の住持であったし、享禄年間では景を持つ夢窓派の住持であった。[23]よって崇聖寺は一山派と夢窓派に属していたようだ。此山が属する仏光派から分派した夢窓派であるから、崇聖寺は永徳寺と緊密な関係を保っていたようだ。このことは天境の無規矩に永徳寺への入院僧三名が記され、越前では他の寺の記載が無いことによっても窺える。

また『蒼蔔集』[24]によれば

「春苑住越崇聖諸山」とあって、寛正三年（1462）までに崇聖寺は諸山位を得ていたようだ。しかるに弘治三年（1557）十一月に曹洞宗洞雲寺に寺領目録を提出していることから、洞雲寺末に転じたようだ。次いで所在地を探ってみたいと思う。『崇聖寺寺領目録案』[25]には

敷地分　四方搦　南者鍬懸之道大岩ヲ堺、西者山之嶺ヲ堺、北者岩松名を堺、東者川向之田ヲ堺、（中略）

八石　在坪西縁篠蔵之後ニ在之、此外川流并土免在之、寄進崇聖寺殿

これをみて『大野郡誌』[26]は「崇聖寺は今の地蔵湯―登龍館保田六―の地なるべし。」と記し、『大野市史地区編』[27]は「洞雲寺より南方、砂山の東麓にあったようだ」と記している。

よって両書は崇聖寺の旧地を大野市清瀧町砂山下一（122字）・砂山下二（123字）に比定している。なお、『得江頼員軍注状』に「西方寺城」と記されるし、該地あたりを西方寺村と称した[28]ようだから、崇聖寺開創以前に西方寺が存在していた。この西方寺の跡地に崇聖寺が入り、金森長近の築城のために洞源寺は寺地を移動させられ、崇聖寺の北地に洞源寺が越して来たようだ。因みに『正徳写本洞雲寺由緒』の末寺庵寺[29]にある西方寺・崇聖寺の記述は時代の錯誤があり信用できない。

次いで開基についてみてみよう。開基檀越は寺領目録に「崇聖寺殿」と寺号と同じ人物と考えられるから、斯波満種（みつたね）であった[30]と考えられる。ただし満種は永和（1376）二年生まれであるから、永徳（1381）元年の開創はわずか三歳であり、実質的には父親の義種であったと考えられる。このことは前出の寺領目録の寺領寄進の筆頭が別書では崇聖寺殿（満種）に変えて広徳院殿（義種）となっている点からも裏付けされよう。また鍬掛にあった洪泉寺は満種の子の持種（法名道顕）の菩提寺[31]であった。両寺は低い山地（砂山）を挟んで東西に建っていたことになる。大野郡は持種系斯波氏と被官の二宮氏の私領的な地域だった[32]ことによるものであろう。

なお、わずか三歳の子の法名を寺名にして禅寺を建立するなどとは、極めて異例なこととみられる。このような事態の発生の背景を探ってみたいと思う。満種は高経の五男であるが、四男の義将は管領となっており、兄義将と満種は仲がよく、『日工略集』によれば、義堂、絶海、玉岡（別源の法嗣）、等の錚々たるメンバーが和漢聯句など、度々集っている。天境が参加した記録は無いが、前述した通り、玉岡と天境は水魚の交をしていた。よって満種と天境も親密な関係であったとみられる。永徳元年十一月十九日の条には、「或告天境和尚昨夕示寂」[33]とあって、天境は十八日に示寂していた。つまり崇聖寺開山日と天境示寂日が重なっている。思うに、天境の病が篤くなって、急遽、天境をして開山に請じたのではなかろうか。

また斯波満種と禅宗との関わり[34]について、「斯波満種末平名寄進状」[35]があって、満種は応永（1402）九年に命賢禅尼の霊供養田として大徳寺如意庵に三町八反の田地を寄進している。末平名は春近郷内にあって坂井郡春江町辺りに比定される。なお、雪峰山崇聖寺との山号と寺号は中国十刹の雪峰山崇聖寺（福建省）からとったものと考えられるが、越中に萬松山崇聖寺があり、加賀にも安国崇聖寺がある。北陸三県に同寺号の禅院があるのは不審である。あるいは三寺院とも満種に関わるものかもしれない。今後の課題としたい。

因みに前出の蒼蔔集は文筆僧で名高い横川景三の法語集である。横川（夢窓派）による代表的文筆物の漢詩文の百人一首には、雪村と別源の漢詩が挙げられている。なお北越の三詩僧として、雪村、別源、後の時代の良寛が挙げられている。

③崇聖寺関係年表

1381.11　天境霊致を開山に請じ崇聖寺開創（永徳元年）
1381.11　天境南禅寺善住庵で示寂（永徳元年）
1455.　羽丹生縫原に洞雲寺創建（享徳4年）
1462.12　この頃までに崇聖寺諸山位
1462.12　春苑□　諸山崇聖寺入院（寛正3年）

1530.02　住持景讃朝倉景高寺領安堵（享禄3年）
1540.07　朝倉氏奉行人寺領買得安堵（天文9年）
1557.11　宗順寺領目録洞雲寺に提出（弘治3年）

1　宗学研究　第26号（1984.3）　日本禅宗史における達磨宗の位置　船岡誠著
2　叢書　禅と日本文化10禅とその歴史　達磨宗と摂津国三宝寺　原田正俊著　p96
3　宗学研究　第28号　越前波着寺の行方　石川力山著　p112
4　福井市立郷土歴史博物館　研究紀要第13号　越前波着寺の遺跡について　松村知也著
5　宗学研究　第28号（1986.3）　越前波着寺の行方　石川力山著　p112
大日本仏教全書　第57巻　図像部7　阿娑縛抄　第十二延暦寺灌頂行事の奥書　p65
6　福井県史　資料編4　瀧谷寺文書　p278
7　福井県史　資料編4　瀧谷寺文書　p313
8　加賀大乗寺史　館残翁著　p18
9　前掲5　p110
前掲8　p19
永平寺史　上巻　p247
10　曹洞宗全書　語録一　義雲和尚語録　p18
日本の禅語録4　義雲　篠原寿雄著　p268
11　越前若狭歴史街道　上杉喜寿著　p37、p203
九頭龍川にかかる久米田橋の修繕費が公費でまかなわれている奈良期の記録があり、古代北陸道の裏街道として機能していたようだ。中世には朝倉街道として用いられ、足羽川には成願寺の渡し、天神の渡し、が記録にある。
12　宗学研究　第30号　道元禅師と北越移錫の真相　守屋茂著　p21
越前若狭山々のルーツ（上杉喜寿著p182）に、一乗山については、泰澄生誕地の三十八社の真東に当たり、その山麓に浄教寺を創建したとし、その山号寺号は滝水山一乗寺、滝水山浄教寺、妙法山一乗寺と諸々の説があるとしている。
13　大安寺文書
14　大安寺文書
心のふる里　東安居郷土誌編纂委員会　p25
15　福井県立図書館所蔵　一向一揆史料集成　大安寺文書影写本
16　福井市史　通史編1　古代・中世　p486
17　福井市史　資料編2　古代・中世　p448
18　前掲16に同じ
19　新訂　越前国名蹟考　杉原丈夫編　p358
20　福井近傍之図　福井市　二万分の一　歩兵第七連隊　明治二二年
21　福井県史　資料編2　中世　p152
22　東山歴代　原本は建仁寺両足院蔵、同筆写本東大史料編纂所蔵による。この編者は江戸期の五山研究者の両足院主高峰東晙による。「日工集」とは義堂周信の空華日用工夫集の略で、義堂の公用日誌である。この抜書が「空華日用工夫略集」であるが、これには永徳元年十一月十八日の記事は省かれている。「日工集」は義堂生存中に過半が失われたようで、原本は現存しない。しかるに東山歴代の編者は何かによって当記述を書いた筈であり、当該日付記事は現存している可能性があるが、筆写は未見である。
（参　日本禅宗史論集下の一、空華日工集考）
23　福井県史　資料編7　洞雲寺文書　p324・p329
24　五山文学新集　第一巻　横川景三集　p854
25　福井県史　資料編7　洞雲寺文書　p329
26　福井県大野郡誌　下編　大野町　p570
27　大野市史　地区編　崇聖寺　p117
28　同前　西方寺村　p114
29　福井県大野郡誌　下編　p568
30　室町幕府守護職家事典　下p52　斯波高経の第五子義種の子に満種　崇聖寺殿大江道源とある。
31　福井県史　通史編2　中世　p473
32　同前
33　空華日用工夫略集　太洋社　p150
34　日本禅宗史研究　竹貫元勝著　p281
35　大徳寺文書　第3031号

4　鎌倉からの導入

4・1　大慶寺との関わり

前述のように、妙法寺は寂円の示寂の正安元年（1299）以前に、寂円によって、禅宗化が図られた。しかし『幻雲稿』[1]には

仙甫登公座元住越之妙法々眷疏并有序

藕以。越之前州路少林山妙法禅寺。乃法源禅師挿草地。而請仏源師為開山始祖也

とあって法源禅師（秋澗道泉）が草創し、仏源禅師（大休正念）を開山始祖に請じたとある。『秋澗泉和尚語録』[2]には

秋澗泉和尚住鎌倉縣霊松山大慶禅寺語録

中穐上堂、（中略）謝小松寶蘊長老、越州妙法長老至上堂、霊松之翠、小松之風、境致両様、清味一堂、（後略）

とあって、正和三年（1314）中秋八月十五日に妙法寺長老が鎌倉の関東十刹大慶寺で上堂を遂げたとあって、幻雲稿の記述に合致する。秋澗は大休の法嗣であるから、大休を開山に請じたことも妥当である。寂円による禅宗化より十五年後のこととみられる。

永徳寺も所在地不明ながら、室町期には諸山位を得ていた。義準が道元示寂後に東密に転じて、越前の地に永徳院を建てたことが知られており、この永徳院が永徳寺の前身であったと考えられる。『秋澗泉和尚語録』[3]には

仏涅槃上堂、（中略）

謝永徳寺長老并庵主上堂、（後略）

とあって、永徳寺の長老と庵主も延慶四年（1311）二月に大慶寺で上堂を遂げている。妙法寺長老の上堂より三年早い時期であった。恐らく鎌倉御家人による手引きがあったものと考えられよう。秋澗は兼密禅を実践する僧であったので、妙法寺・永徳寺長老の大慶寺での上堂は、密教系寺院が禅を兼修禅として受入れ易い状況にあったと考えられる。

以上は前稿[4]で詳述しているので、更なる重複を避けよう。

①大慶寺

妙法寺・永徳寺の長老が上堂を遂げた秋澗住する鎌倉大慶寺について、少し記しておきたい。『鎌倉五山記』[5]には

関東十刹位次

霊松山大慶寺　仏源禅師　嗣石渓　塔頭方外庵　秋澗道泉禅師　嗣仏源号法源禅師　七月七日示寂。

『鹿山略志』[6]には

大慶寺　山曰霊松、開祖　勅諡仏源禅師、諱正念、字大休、嗣法石渓月、宋国人、文永六年来化、開当山為第二世、正応二年己丑十一月晦日示寂、塔于鹿山蔵六庵、塔曰円湛、当山後陞十刹之位、諸堂及塔頭、中古罹災変尽化烏有、只存方外庵一宇、

とあって渡来僧の大休正念が文永六年（1269）頃に開創し第二世として住した。そして至徳元年（1384）に関東十刹の位を得たが、後に被災し諸堂・塔頭が焼失した。しかし方外庵のみ残ったとある。大休の尊像の銘札には「本願檀那長井光禄」とあることから、大慶寺の開基は長井光禄が開基[7]とみられる。開創時期は不明である。現所在地は鎌倉市寺分にある。（鎌倉中心部より4㎞西方）

②方外庵

秋澗が住した方外庵もみておこう。

方外庵[8]　開祖　勅諡法源禅師、諱道泉、字秋澗、嗣法仏源禅師、住大慶移寿福、元享三年癸亥七月十日示寂本庵、雖在大慶之旧址、今属于鹿山塔頭之列、

とあって方外庵は秋澗によって開かれた。現在は大慶寺の旧址にあるが、円覚寺の塔頭になっている。なお秋澗は大慶寺に住したが後に寿福寺に移ったとある。

なお現在は鎌倉市寺分一丁目に大慶寺があって、その堂内には大休正念と秋澗道泉の尊像が本陣の両脇に安置されている。当地は大慶寺の旧地のあって、方外庵として残っていたが、昭和十九年に大慶寺と改めた。[9] なお大慶寺は天保年間に廃寺となったが、方外庵は円覚寺の塔頭となって存続した。

4・2　円覚寺白雲庵との関わり

①白雲庵

曹洞宗は道元による第一波の後、第二波として延慶元年（1308）に渡来僧東明慧日によって宏智派の禅がもたらされた。そして最も長く在住したのが円覚寺であり、寺内に自らの退去寮として白雲庵が創められた。この東明の渡来期より示寂まで随侍していたのが、越前出身の別源円旨であった。よって東明の年譜は別源の足跡でもあった。別源の足跡については、「5・3　肥後を拠点とする曹洞宗永平派大智と曹洞宗宏智派別源との関わり」で記してみたいと思う。ここでは白雲庵の特質、東明下及び別源の行実等などをトピックス的に記してみたいと思う。

白雲庵の創立は東明の八年間にも及ぶ円覚寺入院中の正和年中であったようだ。東明の徒弟達はここで師とともに起居していた。そして円覚寺文壇とも言える文筆活動が盛んに行われ、白雲庵がその文壇の中心となった。しかし暦応三年（1340）十月に東明が示寂し、庵内にその塔が造られ、退去寮から塔頭に移行した。折りしも政情が不安定になってきたことから、別源は白雲庵を辞して越前に戻ってきたようだ。別源が去って白雲庵の文壇は一時衰退したが観応二年（1351）の東陵永興（宏智派）の来日のよって再び文壇活動が活発となった。特筆すべきは別源はこの時期に越前の善応寺にあって、「可休亭に題す」[10] の漢詩を作った。その詩額には「野偈八句題可休亭時赴南禅東陵和尚相招云　文和二年（1353）癸巳季春」とあって、自らの病をおして南禅寺に赴き東陵を補佐した。また「可休亭に題す」は別源の代表作として五山文学上で著名である。

その後、白雲庵は東明の関東徒弟達によって受け継がれたが、近世になって臨済に転じて今日まで存立している。また別源下の文筆僧は勿論、永平派の文筆僧も白雲庵に止宿するなど、関東における曹洞宗の拠点ともなっていた。

②別源の詩文僧としての活動

別源は在元中に天童山で宏智派の雲外雲岬（東明同門・東陵の師）に法を学んだが、一方では鳳台山保寧寺の古林清茂について詩文を学んだ。古林派下の文芸活動は金剛幢下とよばれ宗派を超えて大いに栄えた。この文芸活動によって別源は在元中及び帰国後を通して幅広い人脈形成を行った。また、在元中の文芸の師古林から授かった「古林清茂墨蹟、別源円旨送別偈」は、別源の有力檀越であった朝倉氏に伝来し、現在は五島美術館に所蔵されて、国宝となっている。当時から垂涎の的であったようだ。別源の十一年に及ぶ在元中に天目山で中峰明本（虎丘派破庵・雪岸下）、嘉興府本覚寺で霊石如芝（松源下）、華頂の無見先覩（破庵下）、廬山東林寺で古智慶哲（大慧派）、円通寺で竺田悟心（破庵下・清拙同門）、妙果寺で南楚師説（松源下）、他にも隠

遁している龍厳徳眞（破庵下・清拙同門）と絶学世誠（破庵・雪岸下）の元にも赴いた。錚々たる碩学を歴参していることから、総じて詩文の勉学に力点を置いていたようだ。別源は帰国にあたり、在元中の作品集の序文を禅林トップクラスの霊石に依頼した。「叢林中、語言をもって道の浅深を見るのを標準となす。今、旨侍者（別源）のつくるところを見るに、十一余年の南詢むなしくそむかざりき（十一年余りの南中国での遍歴はあだには終わらなかった。）、敬うべし。」と評価を与えている。[11]

「五山文学の精華ともいうべき詩文集の反響は、もっと強烈なものであった。たとえば、清拙正澄は別源円旨の『南遊東帰集』を「大唐の音調を得、語意活脱して珠の盤を走るが如し」と跋語[12]に書き（中略）このように、かなり高い評価を博した五山禅僧の詩文と語録は、褒めすぎの嫌いがあったとしても、伝統的な華夷観を持っていた中国の文人にとって、大きなカルチャーショックとなったことは事実だったのであろう。つまり、高度な漢文素養をそなえていた日本人を評価するときに、従来の華夷の尺度はもはや適用できなくなったのである。」[13]と、当時の中国でもてはやされた事情の背景を記している。

在元中に大智、雪村、不聞、中厳、竺遷、石室、寂室、古源、古先などと参学中に邂逅したとみられる。[14]此山が石霜山で蔵主を司どった時、別源と邂逅したという。それ以来、無二の親交を持ち、越前安国寺永徳寺の勧請開山を働き掛けをしたと考えられる。絶海も参学先は異なるが、帰国後に親しく交流しているところをみれば在元中に知己を得たかもしれない。

また南遊集の跋で雲外は「新羅人と見違まうほどに流暢な中国語を話した」と記している。

以上、別源の文筆活動を中心に見てきたが、名だたる五山僧を含む文化人はもとより、政界、経済界の指導層とも交流し、弱小の宏智派や朝倉氏の躍進に貢献したものと考えられる。

---

1 続群書類従　第十三集　文筆部　幻雲稿　p121
2 五山文学新集　第六巻　秋澗道泉集　p22
3 同前　p12
4 若越郷土研究　第49号2号　室町期越前の五山派寺院について　拙稿
5 鎌倉志料　第一巻　鎌倉五山記　p28明月院蔵
本続群書類従、史籍集覧にない記事が含まれる。『五山記考異』を底本として、調査蒐集した史料を収載している。
6 鎌倉志料　第一巻　鹿山略志　p142
7 鎌倉事典　p185
8 前掲6　p139
9 円覚寺史　p817
10 朴堂和尚入祖堂法語　建仁寺両足院蔵　題可休亭
なお当詩に関して、「日本漢詩」猪口篤志著などで取り上げられ解説が加えられているが、「五山の学芸」（大東急記念文庫編）で入矢義高氏（p173～181）の解説が最も詳しく、最大級の賛辞を記している。
11 五山の学芸　中国文学からみた五山文学　入矢義高著
12 中国史のなかの日本像　王勇著
13 日本禅宗史論集下之二、日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図　玉村竹二著
14 中世禅者の軌跡　中厳円月　蔭木英雄著　p37

5　海上系による伝播
―曹洞宗永平派と宏智派の肥後の拠点―

・はじめに

越前に本拠地を定めた永平派と、越前で隆盛だった宏智派が、越前より遠く離れた肥後に、離れ島的にそれぞれの拠点を置いていた。

どのような背景のもとで、共にこの地で活動するように至ったのかについて、探ってみたいと思う。あわせてその活性期に双方の中心人物たる大智と別源との関りに眼を向けてみたいと思う。

5・1　若狭日引石製品にみる海上交通路

室町期に五山船による中国との交易が盛んに行われ、その日本側の拠点として九州の日本海東シナ海沿岸地域が栄えたことはよく知られている。さらに中世の小浜に象が陸揚げされたことも同様である。大石氏の研究成果[1]によれば、中世の若狭日引石製の遺物が対馬・五島・平戸地域に500基ほども発見され、その年代は十四世紀後半から十五世紀前半にかけた百年間に限定されているという。また笏谷石製の遺物が肥前の修験関係地でも見つかっている。[2]近世において北前船によって笏谷石製の製品が東北・北海道に運ばれた。それは蝦夷産品を持ち帰り、その戻り船に笏谷石製の製品を船底に積んでバラストともなるようにした。この知見から、日引石製品の五島列島への運搬についても同様の見方ができよう。つまり五山船が舶来品を持ち帰り、国内沿岸伝いに京に運搬され、その戻り船に日引石製品が運ばれたと考えられる。その時期となる十四、十五世紀には沿岸海上輸送交通が活発に行われたことを裏付ける事例と考えられる。文献資料では、鎌倉後期に関東御免津軽船が若狭・越前を母港として北方産品交易を行っていた[3]とのことである。どうも若狭・越前より北方と南方では異なる船便が存在していたのかもしれない。また船便に対して津料が徴収されたが、年貢米を運ぶ上り船に対する課税を升米と称し、下り船に対する課税を置き石と称した。このことからも、若狭石造製品が九州地方に運ばれた理由が見えてくるようだ。

こうした視点でみれば、曹洞宗永平派と宏智派の拠点の一つが肥後宇土に設けられたことは海上交通によって営まれたことであろうことは容易に推察できる。以上により、本稿では海上系の項を設けた次第である。

5・2　先学の研究成果

肥後における永平派と宏智派の事歴について先学の研究成果を概略みておきたいと思う。

「寒厳義伊、肥後進出の背景」[4]（上田純一著）

「肥後大慈寺の建立」[5]（上田純一著）では義伊の大慈寺創立などの活動について論考されている。

「純忠菊池氏と大智禅師」[6]（村上泰道著）では著者が先に「純忠菊池氏」と題した著に、「大智禅師御伝記」を追記した構成となっている。

「禅僧大智と肥後菊池氏」[7]（広瀬良三著）では永平派大智の肥後での活動について論考されている。

「大智」[8]（水野弥穂子著）では、まず大智の生涯をトピックス風に記した上で、偈頌、法語の現代語訳を記し、大智の年譜を記している。

「東明慧日の宗風とその門流」[9]（大久保道舟著）では、東明の来歴を検討し、特に肥後安国寿勝寺に関する検討を行っている。加えて東明法嗣の別源と不聞について検討を加えている。

「宏智派の歴史的性格」[10]（今枝愛真著）では永平派

と宏智派の文筆活動と交流について記されている。「中世洞済交流に関する一考察」[11]（中尾良信著）では、中厳円月の洞済交流に果たした役割を論じている。一部に大智の鎌倉で臨済との交渉について触れている。

「合志氏とその活動」[12]（阿蘇品保夫著）では合志氏の活動について論考されている。

「肥後国安国寺利生塔考」[13]（井上正著）では肥後安国寿勝寺の変遷について論考されている。

以上の論考が知られるところであるが、曹洞宗永平派大智と宏智派別源との交流については余り触れられていないので、この点について記してみたいと思う。なお筆者は義伊と大智に関する論考を充分に捉え切れていないことを付記しておく。

5・3 肥後を拠点とする曹洞宗永平派大智と曹洞宗宏智派別源との関わり

① 年表

まず東明及び別源と大智の事歴を対比年表として挙げておく。参考までに道元と義介と義伊の肥後での事歴も挙げておく。

1227.08　道元肥後川尻に帰着（安貞元年）

1253.08　道元示寂（建長5年）

西暦	東明事歴	年齢	別源事歴	年齢	大智事歴	年齢
1289					大智宇土で出生　正応2	
1294			別源片上で出生　永仁2			5
1300					義伊示寂	11
1308	肥前到来　延慶元	37		14		19
1309	鎌倉禅興寺入院　延慶2	38		15		20
1310	鎌倉円覚寺初住　延慶3	39	東明に参ず　延慶3	16		21
1310	肥後寿勝寺開創　延慶3	39		16		21
1314				20	大智入元　正和3	25
1320			別源入元　元応2	26		31
1324				30	大智帰着　正中元	35
1330	寿勝寺諸山　元徳2	59	別源帰着　元徳2	36	肥後広福寺開創　元徳2	41
1333					明峰に嗣法　元弘3	44
			円覚寺後版			
			建長寺前版			
1340	東明示寂　暦応3	69		46		51
1342			弘祥寺再興　康永元	48		
1342			肥後寿勝寺第四世　康永元	48		53
1344			寿勝寺合志移転　康永3	50		
1345					菊池本城合志占領　興国6	56
			越前善応寺開創			
1353					肥前加津佐円通寺建　正平8	64
1354			東陵南禅寺に招　文和3	60		
1357			京洛真如寺入院　延文2	63		
1364			弘祥寺諸山位　貞治3	70		
1364			別源示寂　貞治3	70	肥後広福寺焼失　正平19	75
1366					大智賀津佐で示寂正平21	77

1260.01　義伊肥後古保里如来寺開創（正元2年）
1262.　義介帰着（弘長2年）
1267.　義伊筑前に帰着（文永4年）
1283.　義伊肥後河尻に大慈寺開創（弘安6年）

なお東明の年譜は「東明慧日略年譜」[14]を参考にした。

②　大智と別源

年表に挙げたように大智と別源、両者の生年や示寂等似かよった面がある。別源は越前片上で生を受け、青年期に至るまでは越前仏種寺で過ごし、折り良く元より渡来した宏智派東明慧日に師事し、十二年ほど執侍したという。『肥後国志』によれば別源は佐々木長綱の舎弟とした系図が示されている。その長綱は肥後の叡山領が侵されていたことに対処するため、叡山から派遣されていたという。この伝承を信ずれば、別源が兄を頼って肥後に赴いた時に東明と邂逅したことが考えられる。そして鎌倉円覚寺等で、十二年ばかり東明に執侍したという。そして元応二年（1320）に入元し、古林清茂（詩文修得）、雲外雲岬（宏智派）、中峰明本、霊石如芝等を歴参して、元徳二年（1330）に帰着した。

一方、大智は肥後古保里荘で生を受け、若くして古保里荘大慈寺に入ったようである。そして青年期を能登永光寺で過ごし、正和三（1314）年に入元し、古林清茂、雲外雲岬（宏智派）、天目山で中峰明本（虎丘派破庵・雪岸下）、華頂の無見先覩（破庵下）と別源に先行して歴参し、正中元（1324）年に帰着した。両者の在元で重なる期間は四年ほどしかなかったようだが、古林清茂への参禅を通じて両者は知り合い、共に金剛幢下となる。また大智は天童山で宏智派の雲外雲岬にも参じたとされるから、ここでも接触があったとみられる。両者は同じ曹洞宗下にあり、しかも詩文僧としても共通する話題に事欠かない状況にあった。別源の在元中の詩文集である「南遊集」には「大智禅師」と題する詩偈一首がある。[15]大智の偈頌集にも「辞源長老」と「送源上人」の二首があり、前者は別源が肥後安国寺を離れるのを惜しんでいる。「大智禅師肖像賛」は別源が記したもので『大智禅師逸偈行録』に収められている。[16]ところが、別源は北朝側に立つ豊後の大友氏の庇護を受けており、かつ兄長綱（合志（かわし）氏を名乗る）は大友氏の肥後侵攻の先兵ともなっていた。別源はそのあおりを受けることになる。

一方、大智は肥後生まれであり、南朝側に立つ菊池氏の庇護のもとにあった。両者ははからずも敵対関係に陥ることとなった。

なお肥後寿勝寺は古保里荘の佐野寺を禅宗に改め、東明を開山に請じた。その後、寿勝寺を合志郡久米に移転し、肥後安国寺に指定した。北朝側が進めた肥後安国寺を長綱の拠点であった久米に移転創立した。政治的思惑によるものらしい。しかし程なく寿勝寺は元の宇土郡佐野に戻されたようで、これ以降は室町期を通じてこの地にあったという。別源は晩年になって、肥後古保里荘の寿勝寺第四世として赴任している。寿勝寺が久米に移される前であったようだ。この赴任地の古保里は大智の出生地の宇土郡内にあり、義伊開創の大慈寺もあることから、大智と別源は再会し旧交を温めあったものと考えられる。

しかしほどなく九州に於ける南北朝の戦いも終息に向かい、南朝側に立った菊池氏は衰退し、大智は肥前加津佐の水月庵円通寺へ退去し、失意の内に示寂した。（なお大智の示寂後、九州は本土より数年遅れて南北朝合一がなされ

た。それ以前に九州南朝側の衰退があり、菊池氏と合志氏との和解の斡旋もあって、菊池氏は幕府寄りになっていったとみられ、合一後に菊池氏は肥後守護に任じられ、合志氏もその傘下に入っていった。）

海上交通と海外交易に眼を転じてみる。大智は帰国後に肥後と能登間を度々行き来している。これは船便を用いたことであろう。（なお大智は明峰から度々、能登に留まることを要望された様だが、肥後は故郷であることもあってか、肥後を離れなかった。）一方、東明と別源自身の肥後行きは、多くは無いが、宏智派の僧の行き来は常時散見される。

交易に関する資料は見当たらないが、中国側の史料によれば、「日本国王良懐」の使者と称して康暦二年に入貢した如遥（別源の法嗣とみられる）は、「馬、方物を奉ず。洪武帝、却下する。倭寇禁圧をしないことに強く抗議。」[17]とあって、交易に関わっていたことを窺わせる。

なお大智の偈頌集に「上東明和尚」と題する一文があって、大智は東明と邂逅したのか。また邂逅したとすれば、その地は肥後か、関東かについては判然としない。また東明は肥後寿勝寺へ赴いたことがあったかどうか、また別源との東明との邂逅はどこであったかについても明確ではない。

---

1 ひびき　第1号　1997・11　日本石造物学会　中世の海の道―中央形式塔のなぞ―　大石一久著
石が語る中世の社会　長崎県の中世・石造美術　大石一久著　長崎県労働金庫発行　p33～50

2 若狭の石造美術2　田岡香逸著　p5
肥前観世音寺の宝篋印塔は笏谷石製で花文をめぐらした月輪に弥陀三尊の種子を配したもの、と記している。

3 中世水運史の研究　新城常三著　p401

4 熊本史学57・58合併号　寒厳義伊、肥後進出の背景　上田純一著

5 九州中世禅宗史の研究　上田純一著

6 純忠菊池氏と大智禅師　村上素道著　昭和9年発行

7 禅宗地方展開史の研究　広瀬良弘著　禅僧大智と肥後　菊池氏

8 日本の禅語録　第九巻　大智　水野弥穂子著

9 第一義　29巻10号　大正14年10月　東明慧日の宗風とその門流　大久保道舟著
なお、当稿には別源の出自について、佐々木長綱の舎弟に別源とある「肥後国志」の「合志系図」を偽作とした上で、『樹下堂漫記第二』に「別源和尚父直無居士。俗名島屋久兵衛。参丹波祖三。透得趙州無話。祖三居于杉生妙楽寺。祖三後居于京師太子山町。平跡指南。能大師流。」の記事を紹介している。筆者は現時点で『樹下堂漫記』なるものを確認出来ていないので、確定的な結論を出せない。しかし樹下堂は草山祖芳（妙心寺派文化三年示寂）の号であり、草山も住したことがある雑華院の第六世に別源楚英があって、草山は孫法嗣にあたる。よってこの別源和尚とは別源円旨のことではなく、別源楚英のことであるようだ。よって大久保氏の早とちりと考えられる。

10 中世禅宗史の研究　今枝愛真著　第三章第四節三項　宏智派の歴史的性格

11 義雲禅師研究　中世洞済交流に関する一考察　中尾良信著

12 大津町史　第二章第二節　合志氏とその活動　阿蘇品保夫著

13 熊本史学42号　肥後国安国寺利生塔考　井上正著

14 曹洞宗研究員研究生研究紀要　第七号　石川力山著

15 五山文学全集1　南遊集　p237

16 日本の禅語録九　大智　水野弥穂子著　p137、249

17 「日本国王良懐」と足利義満　川戸貴史著

6．その他の禅宗関係遺物

6・1　日円寺遺跡（越前市別印町）

至徳三年（1386）銘の重制無縫塔の八画柱状の竿が残っている。その碑文は「□田珎□禅門」「至徳三年八月二十日」とある。これは日円寺に僧籍を置く人物の塔婆と見られる。至徳三年には日円寺は既に諸山位を得ていた時期とみられるので、日円寺草創期のものではないが、貴重な遺物である。なお、この出土地は教徳寺の墓地であったようだ。また大正年代に教徳寺北側の民家の新築整地作業中に、層塔か宝篋印塔の塔身とみられる角形の四面に仏を浮彫したものが出土した。よってこの出土地近傍一帯が日円寺の寺域であったようだ。

6・2　円道坊塔婆（越前市白崎町）

古式の重制無縫塔の逸品が残っているが、残念ながら銘を彫り込む竿を失っているので由来については不明である。無縫塔は禅宗の僧に用いられる例がほとんどであるが、南北朝・室町期には浄土宗や時宗の僧たちも用いたようなので禅宗僧のものとは断定できない。

なお伝承ではこの塔婆は円道坊との呼称で呼ばれている。また『越前地理指南』では「政頼の墓」と記されている。「政頼」は朝倉氏及び江戸期の越前藩のおかかえ養鷹家である岸五郎左衛門の初祖に養鷹技術を伝授した人物と伝えられている。この岸氏は南北朝期には杉崎三ヶ村をめぐって祇園社と所領争いを起しており、どうも鎌倉末期には南越地方を拠点としていたようなので、この「政頼の基」とも近傍であることに注目したい。なおこの墓式は在家に用いられた例もないようだが、まれに上流の人の墓塔に用いられた様なので、「政頼」の墓塔とも考えられる。

今少し筆者の夢想をお許しいただこう。

この塔婆は円道坊とも呼ばれており、円は寂円の法嗣の法諱を想起できる。また『越藩拾遺録』に道元の入越について、「当国ニ下り、府中ノ南白崎村ニ住シ、後、大塩村ニ移り、又味見村ニ移り、其後志比ノ庄寺本村ニ移り（後略）」とあって、道元ゆかりの地とも伝えられる。よって寂円が道元ゆかりの地、白崎にも触手を伸ばしていた可能性も残っていよう。

6・3　土山願成寺（越前市土山町）

土山願成寺の無縫塔は重制の形式から棹が無い形式であり、棹を失った重制か、あるいは単制移行期のものかは不明である。伝承では開山塔であるという。因みに能登永光寺の無縫塔は古式単制の塔である。単制は重制よりは少し時代が下がると云われているが、興味深い塔婆である。能登永光寺の塔は一説には開基塔であるという。

なお、永平寺にはこの種の塔婆が残っていない点を特筆しておきたい。また、能登利生塔のある永光寺に関わるものとみられる板碑には、了円・文明十年銘の不動明王の種子「カーン」が彫られた町石がある。これは石動修験道の活動がなされていたとみられる点で特筆しておきたい。

7．附説

7・1　岩井説の遺跡再確認

筆者は、この岩井説が論拠とする遺跡と刻銘の再確認を行ってみた。

①行人窟の碑文

禅師王子山の西方に雨乞山（標高572m）がある。その山頂から報恩寺山越しに白

山が展望できる。その山頂の東面下方30mあたりに行人窟があり、高さ10m幅10mほどの大岩がせり出している。その大岩の下方に座禅石と称する高さ50㎝幅1m程の岩がある。その前側面に文字角2㎝ほどの陰刻文字が彫られている。時代経過と共に表面剥離が生じた部分があり、残存部も摩滅化している上に、陰刻部位に重ね彫りしているものが多く、判読できる箇所が限られている。判読できる文字列を整理しておこう。便宜のために陰刻部位を記号化しておく。最右面をA（付図2）、その斜め左上面をB（付図3）、左部上面をC（付図4）、とする。

安永初年登拝記録

慈聖坊慈眼　確認できず
臺眼坊　B部、文字角20㎜
最妙坊　A部、文字角20㎜
慈仁房　確認できず
康治元歳　A部、文字角15㎜
（康治元歳八月と読める）

岩井論考

乗楽坊　A部、文字角20㎜
最妙坊　（前出）
禅十坊　A部、文字角15㎜
臺眼坊　（前出）
康治元□　（前出）
建保五年正月　B部、文字角20㎜
並月寺住　A部、文字角15㎜

なおB部には20㎝ほどの銀杏葉形の格狭間が陰刻され、その格狭間内に横方向縦書きに「建保五年」等の銘が彫られている。またA部の上方が、その格狭間で断ち切られていることから、格狭間が彫られた時期は「康治元歳」以降ではあるまいか。

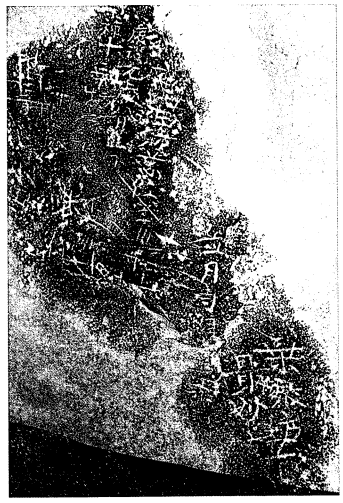


図2

図3

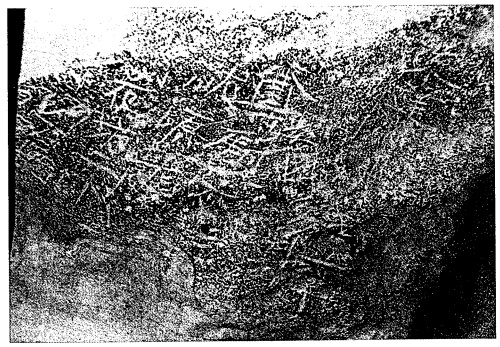


図4

②大光寺遺跡

禅師王子山（標高５８５ｍ）の西方にある大光寺山（標高６３０ｍ、前記雨乞山との禅師王子山とのほぼ中間地点）、その山頂より東方に約１００ｍ下った地点に大光寺遺跡がある。横幅約１５０ｍ、奥行約35ｍほどの平地には大杉が10本ほど点在している。桜の古木もあり、春に見事な花をつける。北西の大光寺山山頂に向う斜面は崩壊地で、大仏寺遺跡によく似た立地である。

その開削地より北西方位に大光寺山があり、頂上付近の東面には大岩が露出している。急斜面を登った山頂は南北35ｍ東西20ｍほどの平地がある。そこには笏谷石製の柱標に白山伏拝と刻まれている。近世の所産であろう。そこからは白山連邦が一望できる。

さて香の岩について、山頂付近には高さ10ｍほどの大岩が露出しており、白山方位に向って開けている。下から見た限りでは側面に刻字が確認できなかった。上面の確認もできなかった。

7・2　日野大寺の自然石塔婆について

①日野山大寺遺跡（越前市荒谷町）石造遺物

日野山北麓の山腹（標高３００ｍ）にある山林寺院跡には自然石に重制無縫塔を浮彫りした開山塔がある。「開山」「三十三」の文字は読みとれるが、ほかの文字は風化のため判読不能である。重制無縫塔は鎌倉期に中国から導入された形式で、主として禅僧の塔婆として用いられた。当所には自然石に五輪塔が陽刻され、水輪に大日如来の種子「バン」と「二世」とが陰刻された塔婆も併設されていることから、恐らく白山密教系の山林寺院が禅宗を兼修したものと考えられる。鎌倉後期のものと考えられる。因みにこのように自然石に五輪塔を陽刻する形態は日本海沿岸地域に散見されるが、無縫塔の陽刻事例はきわめてまれなケースで全国的にも貴重な遺物とみられる。しかも山林寺院が禅宗を取り込む過程を物語る貴重な文化遺産である。

②田岡香逸氏の見解について

田岡氏は大谷寺の九重石塔と近江蔵王石工との関係にふれている記述[1]があり、ここで取り上げておく。

「大谷寺の元享三年銘のある九重塔について、平末吉の石大工銘を刻んでいること、基礎の上端に反花を刻出していること、塔身の月輪に花文をめぐらしていること、以上がその特徴である。反花を刻出している層塔は他の地方には無いが、近江に十基ほど見られることや、末吉が平姓であることなどから、石塔寺の正安四年銘の宝塔や西明寺の嘉元二年銘の宝塔などの石大工平景吉と血縁の人と推定できる。ところが花文付月輪を持つ最古の遺品となる福井市高雄神社[2]の正応三年銘の七重塔は笏谷石製であることから、これが越前の石造美術の特徴と考えられ、大谷寺九重塔に月輪花文があることから、平末吉は地元の工人でないかとの疑いがもたれる。しかし美濃石徹白白山神社の八角形石灯篭の火袋の円窓の周囲に花文をめぐらす特殊の手法は大谷寺塔に共通している。高雄神社塔や白山神社の八角形石灯篭には石大工名を刻んでいないが、50基に及ぶ平景吉の特徴を有していることから、白山神社石灯篭は平景吉の作と推定できる。塔身の三面に弥陀三尊種子を配した珍しい手法が大谷寺塔と共通している点もあわせて考慮すれば高雄神社塔も平姓の石大工作とみられる。以上、三基の石大工は血縁関

係の人であったとみられることから、他の二基の石大工が近江蔵王の石大工であったことを疑わしめないであろう。」(筆者文意を一部追補)

この知見は越前と修験と関西圏石造美術に関わる事歴だけに傾聴に値する。越前白山系の越智山と石徹白白山神社及び福井市高雄神社に近江系石工の手による遺物があったとしている。さらに近江系の石工と近江蔵王修験は密接な関係にあったとしている。つまり近江系修験が越前白山系の越智山と高雄権現と接触したことを示唆しており、日野権現に禅宗をもたらすことに関与していたとも考えられる。

以上、「近江蔵王の石造文化圏—付　石大工平景吉の系譜とその作品」[3]によれば、近江蔵王の石材および石工と近江蔵王の修験について、示唆に富んだ見解を示された。しかし兼康保明氏によって、その見解に対して再検討が行われ、[4]近江蔵王石工は蔵王石材を使用したとする点、及び蔵王石材と平姓石工との結びつきも否定された。また平景吉を蔵王の石大工とすることも否定された。加えて蔵王石工の出張製作についても否定的な見解を示された。しかし近江蔵王修験と近江蔵王石工との関係については「修験道と中世石造美術」[5]で、近江蔵王石の遺物が石材産地より野洲川を越え遠く離れた飯道山の修験寺院跡にある点を踏まえ、限定的ながら近江蔵王石工と近江蔵王修験の親密性が認められるとし、異なる地盤の修験者同士の結びつきについても認められるとしている。

さらには鈴鹿笹尾峠にある近江蔵王修験者達のモニュメントたる石塔碑文を挙げて、従来より修験者は各地の関所を自由に通行できる権益を有していたことが知れる、と記している。

③　開山塔について（付図5）

前述のような知見に基けば、越前五山の内の一つにあたる日野権現は修験の拠点であって、当地に禅宗の開山塔が所在する理由として、修験者の禅兼修の欲求が強かった事例であり、それは修験者による文化伝達によるものとみなせよう。また双式華瓶入り三茎蓮については、近江式装飾様式ではあるが、それが直ちに近江系の石工によるものとの断定はできないが、少なくとも修験者による文化流入の所産であることは認めてよいと考えられる。

なお大谷寺の九重塔には元享三年平末吉銘があり、畿内系工人平末吉の手による遺物であり、近江系工人が関わる大寺の石造遺物とは共に修験系遺物として関連付けられよう。

図5

④二世塔について（付図6）

特筆すべきは当地にある自然石塔婆5基の内、開山塔と他の五輪塔3基は板碑となって

いる。しかし二世塔のみは縦と奥行きが約1m、横幅が約2mほどの自然石の碑面のみ平面に仕上げ、碑面を45度上向きのまま設置している。加工前から板碑形式をとらない意図があったようだ。

双式三茎蓮については開山塔の右側の様式に準拠する形をとっている。ただし左側の三茎蓮は右の蓮葉を彫り込むスペースをなくしたため、急遽、左半開蓮の左下方に中途半端の半開蓮を追加工したものとみられる。

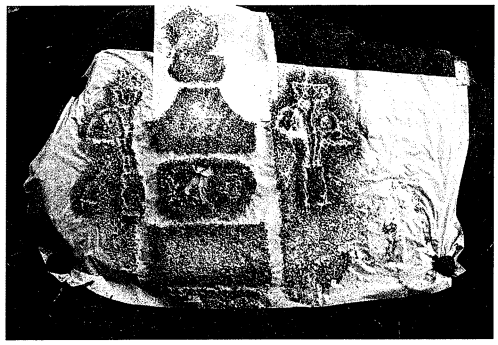


図6

以上、二世塔の双式三茎蓮は開山塔のそれを準拠したものであることから、開山塔と二世塔は同一時期に同一工人群によって製作されたとみたい。しかし二世塔は追加工を余儀なくしたり、板碑様式をとらないなど、中途半端な感がぬぐえない。あるいは弟子の習作であったのかもしれない。

8．関係年表

この稿に関係する事項の年表を挙げておく。

1231.秋　義介波着寺懐鑑に剃髪を受（寛喜2年）
1233.4　道元妙覚寺鎮守勧請文撰（天福元年）
1241.春　懐鑑等一門の道元会下（仁治2年）
1243.7　道元越前下向（寛元元年）
1249.8　波着寺懐鑑示寂（建長元年）
1253.8　道元帰洛途中覚念を訪い、八杉権現に詣でる（伝承・建長5年）
1253.8　道元示寂（建長5年）
1259.　義介入宋す。（正元元年）
1262.　義介帰着す。（弘長2年）
1271.　阿婆縛抄波着寺で書写（文永8年）
1273.10　正法眼蔵波着寺で書写（文永10年）
1273.頃　義準真言宗永徳院開く（文永10年）
1278.　弘祥護国禅寺開創勅額受（弘安元年）
1280.8　永平寺二世懐弉示寂（弘安3年）
この頃　円機長楽寺の開山となす。
1293.　義介大乗寺に移る（永仁元年）
1299以前　寂円妙法寺開山となす
1299.9　寂円示寂（正安元年）
1309.9　義介示寂（延慶2年）
1311.2　永徳寺長老大慶寺で上堂を遂げる（秋澗道泉・延慶4年）
この頃　義演報恩寺に閑居
この頃　永徳寺に開山塔正宗院建つ
1314.8　妙法寺長老大慶寺で上堂を遂げる（秋澗道泉・正和3年）
1314.10　義演示寂（正和3年）
1314.12　義雲永平寺入院（正和3年）
1318.　中厳円月義雲に参禅（文保2年）
1323.7　秋澗道泉示寂（元亨3年）
1333以前　義雲が塔主寛海を葬送
1333以前　義雲が長楽寺円機を葬送
1333.10　永平寺五世義雲示寂（正慶2年）
1333.05　鎌倉幕府倒れる。
1339.8　諸国安国寺設立の嚆矢（暦応2年）

1339.12　能登永光寺に利生塔建つ（暦応2年）
1340. 9　妙法寺城山麓焼討（暦応3年）
1340.　三峰城落城（暦応3年）
この頃　長楽寺を越前安国寺とする
この頃　日円寺に利生塔建つ
1342.02　崇禅寺斯波氏祈祷寺指定（暦応5年）
1342.　弘祥寺再興別源円旨開山（康永元年）
この頃　別源円旨善応寺開く
1363以前　長楽寺焼失
1363. 8　永徳寺を越前安国寺とす（康安2年）
1364.10　別源円旨示寂（貞治3年）
1365.05　永平寺六世曇希示寂（貞治4年）
1365.07　永徳寺杣山庄公文職得る（貞治4年）
1368以前　一関妙夫日円寺住座元
1381.11　天境霊致崇聖寺開く（永徳元年）
1386. 8　日円寺至徳銘無縫塔建つ（至徳3年）
1445.　長楽寺東寺修造料足出す（文安2年）

9．まとめ

越前においては日本達磨宗の禅は、まず修験僧に兼密禅として受入れられたようだ。そしてこの導入方法は日本達磨宗の道元下への集団入信のよって、道元の意図が働いていたかどうかは抜きにして、結果的に成功体験として、肥後における義伊の展開や加賀能登における義介の展開、さらに寂円の展開に活かされたように思う。つまり義伊・義介・寂円の展開をみるにつけ、旧仏教系への対応が非常に友好的な点である。このメソッドは道元の越前での展開にも活かされたように思う。

あと、一つは道元入越に際して、越前国内の台密系のネットワークを通じて得られた情報収集、また導入を働きかけた台蜜系の寺僧による戦略化が行われていたのではないか、との思いに駆られている。こうした働きをしていたのが、小松妙覚寺であったとも考えられる。

そして道元の入越を含めて、越前における禅宗の草創はドラスチックなものでなく、旧仏教系社寺が新しいカルチャーを取込んだ程度のものであったようだ。それは道元をして興聖寺での旧仏教系の反発を受けた、強い反省の元に編み出されたものであって、既得権益を有する層を刺激しないように配慮されたものであったとも考えられる。このような成功体験に基づくメソッドを活かした結果、建長元年の九箇条の住侶制規を出さざるを得なかったのではないか。その実は道元周辺が異様なほどの盛り上がりがあって、厳しすぎるほどの住侶制規を設けてブレーキを掛けざるを得ない状況に至ったとする主張は傾聴に値する。

10．あとがき

岩井説をベースにまとめてみた。岩井氏から学恩を受けたことに謝辞を申し上げる。

筆者の如き者が心情を吐露することは憚れるが、お許しを願いたい。筆者は北村・真柄に程近い所に生をうけたこともあって、永平寺開創に関わる覚念には強い思い入れがある。そうしたこともあって覚念論争や大仏寺論争には強い関心を持って、その論考などを読んでみた。中世古氏の熊谷氏に対する覚念論批判[6]は「当時の資料でなければ証左に値しない。」などとしながら、「資料が少ないからとて後世の著作建撰記に基づく反証」を行っている。また大仏寺論争で笛岡氏[7]は「永平寺移転の論拠を示さないと非移転論の反証には値しない。」などと、凡そその公平性を欠く記述は筆者の感情を刺激する。これらを反証してみたいと思うものの、もとより筆者にはそ

の実力は無く、歯がゆい思いをしていたが、従来、議論されてこなかった視点で、見つめなおしてみたいとの思いに駆られた。また先に「永平寺四代義演の閑居地」[8]について少し論考を記したが、あまりにも近視眼的なものであったと、自責の念にかられていた。その後、筆者は各所の山林寺院を踏査し、永平寺の草創期の論議にも関心を持つ中、「長楽寺開山円機和尚下火」の一文を見て、当稿を起すことを決断した。つまり越前における禅宗草創期を、その前段階たる山林修験地をも視野に入れて、禅宗草創期を見直してみたいとの思いにかられた。未熟な上にきわめて資料の乏しい時代のことで的外れなものも少なくないとも思うが、拙い論考を記してみた次第である。しかしながら道元・永平寺に関する研究は予想をはるかに超えたものであって、その論文は次から次へ芋づる式に出現し、改めて無謀なことをしようとしていたことを思い知らされた。しかし素人なりに纏めてみようと開き直ってみた次第である。なお山林寺院や修験の道の探索は山が荒れて来ている事に加え、熊の出没が気がかりとなり不十分なものとなったが、今後も続行したいと考えている。

最後に大安寺文書の抄出について大安寺の許諾をいただいたものであることを付記しておく。

1　民俗文化　第199号　近江蔵王の石造文化圏5
　田岡香逸著 p1951
2　福井市本堂町高雄神社は明治前までは現在地より南西方向1.5kmの標高350m地点の山上にあって、高雄権現と称した山岳寺院で、泰澄開基伝承を有している。南方が開けた山腹にあって、およそ東西200m、南北60mほどの開削地の旧地が遺っており、足羽平野と白山が一望できる。
3　民俗文化　第195～199号　田岡香逸著
4　民俗文化　第353号　兼康保明著
5　民俗文化　第361号　兼康保明著
6　傘松　第712～717号（平成十五年1～6月）
　今南東郡左金吾禅門覚念は橘以良（1～6）
　熊谷忠興著
　前掲に対する検討
　傘松　第720～721号（平成十五年10～11月）道元
　禅師伝上の覚念考（上・下）　中世古祥道著
7　祖山永平寺開創寺地考　笛岡自照著
8　若越郷土研究　第51巻2号　三里山を取りまく
　泰澄開創社寺について上　拙著